

50529

教科書文庫

5
810
45 1948
01304 49612

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

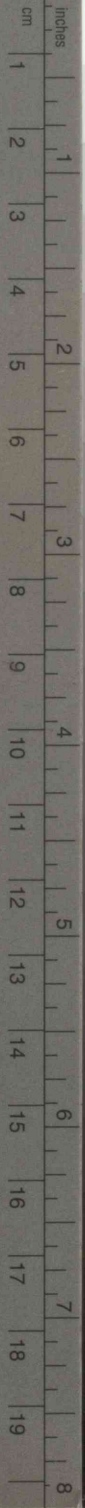


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



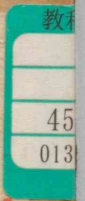
文部省検定済教科書

私たちの國語

一上



附属中学校



中央図書館

教科書文庫

5

810

45-1948

0130449612

昭和二十三年八月二十三日
文部省検定済

中学校國語科用

文壽堂出版株式会社編

私たちの國語



広島大学図書

0130449612





目次

一 楽しい生活	一
〔一〕 汽車に乗って	二
〔二〕 放送とスポーツ	五
〔三〕 笑い話	十三
〔四〕 私の読書	十八
二 美しい自然	二十
〔一〕 やぎの群れ	二十一
〔二〕 春の日	二十九
〔三〕 あけぼのの富士	三十一
〔四〕 都市の表情	三十三
三 空想のつばさ	三十九
〔一〕 てんぐ笑い	三十九

広島大学図書

0130449612





〔二〕 風の又三郎……………	四十七
〔三〕 ミシシッピ川の探検……………	六十八
四 すぐれた人々……………	七十六
〔一〕 創始者の苦心……………	七十六
〔三〕 ストウ夫人……………	八十八
〔三〕 ふるさとの英世……………	八十六

一 楽しい生活

入学おめでとう。

校舎も、先生も、友だちも、教科書も、みんな新しくなった。すべて新しい、われわれの生活を、われわれの力で、明かしく、楽しいものにして行こうではないか。

生活を、楽しく、豊かにするには、どうすればよいだろう。すぐれた詩を読んで、その楽しさにひたることも、その一つである。楽しい経験の詩に作ってみるのも、大きな喜びにちがいない。健康で、力に富むスポーツに親しみ、われわれの若さと生きる力を伸ばして行くこともよい。また、楽しい生活を建設して行った人たちの作品を通して、生活を楽しくするものが何であるかを求めることも、たいせつである。生活が健全であれば、そこには、自然に、明かるといふ笑いが生まれて来る。われわれのまわりどころがっている親しみとユーモアとにあふれた笑話に、われを忘れるのも、楽しいことではないだろうか。読書も、われわれの視野を廣め、心を豊かにするために、なくてはならないものだ。読書のしかたを学び、よい本を読んで行くことを、われわれの習慣にせひ取り入れよう。

楽しい生活は、求めずして與えられるものではない。楽しい生活が何であるかを、よく考えて、われわれの生活を、今すぐ、力強く踏みだして行こう。

〔一〕 汽車に乗って

汽車に乗って

丸山 薫

汽車に乗って、

アイルランドのようないなかへ行こう。

人々が祭の日がさをくるくまわし、

日が照りながら雨の降る、

アイルランドのようないなかへ行こう。

窓に映った自分の顔を道づれにして、

湖水をわたりトンネルをくぐり、

珍しい顔のおとめや牛の歩いている、

アイルランドのようないなかへ行こう。

いなかの夕暮れ

尾崎 喜八

水ぎわにおい茂ったはんの木には、

野ぶどうの青いつるや葉がからみ、

どくだみの白い花と、

露草の花の咲いた草むらのすそをぬらして、

小川がきょうも鳴っている。

ゆるやかな、底力のあるヴィオロンセロの音で。

いなかの夏の夕方の、

美しい空、美しい雲ですね。

村のしつぽくな学校は、

もうとつくに授業が終って、

青葉に包まれた運動場には、

小さな木馬がすみの方でおとなしく、

三本の背の高いポプラが無数の葉をそよがせている。

もうじき暑中休暇の来る楽しい七月の、

美しい空、美しい雲ですね。

麦打ちの済んであとの、

金色の麦の穂が散らばっている農家の踏みかためられた仕事場で、

若い百姓の女たちが、むしろをかたづけたり、

からだをはたいたりしている。

(一) 汽車に乗って

健康な生き／＼した目、太い腕。
黒くすゝけたおもやの台所から、
かまどの煙が紫に立ちのぼる。
暑い一日の熱心な労働がねぎらわれる時の、
美しい空、美しい雲ですね。

山頂から

小野十三郎

(大正詩選)

四

山にのぼると、

海は天まであがって来る。

なだれ落ちるような若葉みどりのなか。

下の方でしずかに、

かっこうが鳴いている。

風に吹かれて高いところに立つと、

だれでもしぜんに世界の廣さを考える。

ぼくは手を口にあてて、

なにか下の方に向かって叫びたくなる。

五月の山は、

きら／＼と明かるくまぶしい。

きみは山頂よりも上に、

青い大きな弧をえがく、

水平線を見たことがあるか。

(こども朝日)

研究

一 「アイルランドのようないなか」とは、どんな景色の所か。

二 「いなかの夕暮れ」は、三つの段に分かれている。各段の場所は、小川・学校・農家であるが、どこから見た空と雲が、一番美しく感じられるか。

三 詩で、同じことばをくり返すのは、そのことばを強調するためである。くり返しをさがしてみよう。

四 一つは、いなかへのあこがれ、一つは、いなかの美しさそのものを、うたっている。観

察のこまかさも、使うことばも、長さも、違っている。こうした点を考えあわせて、二つの詩の違いが、なにによるのか、話しあおう。

五 もう一つの詩には、初夏の山の気分がよく現われている。それはどういうことばによるのか、考えてみよう。

六 詩の持つ感情が、よく現われるように、朗読のしかたをくふうしよう。

七 くり返しを使って、旅行の詩を作れ。

〔二〕 放送とスポーツ

一 楽しい生活

五

四十種類にのぼるスポーツ放送の中にも、大衆に人氣のあるものと大衆に人氣のないものがある。また、ラジオに適しているものと、ラジオに不向きなものがある。現在、聴取者に支持を受けているスポーツ種目は、すもう・野球・ラグビー・水泳・陸上競技の一部、けんとうなどである。その他のスポーツは、ラジオではほとんど受けない。どういふところに原因があるのであろうか。

結論から先に言うと、攻防の度合のめいりやうなものが、ラジオのスポーツとして適している。攻防の度合のめいりやうなものは、ラジオの種目として不適當である。

攻防の度合のめいりやうなもの

野球・アメリカンフットボール・しゅう球・水泳・陸上競技トラック（中距離・障害）・ホッケー・ラグビー。

攻防の度合の比較的めいりやうなもの

すもう・バスケットボール・アイスホッケー・けんとう・レスリング。

攻防の度合のあまりめいりやうでないもの

陸上競技トラック（短距離・長距離）・柔道・剣道・バレー・スケート（スピード）・競馬・馬術（障害）・射撃・ボロ。

攻防の度合のめいりやうなもの

テニス・陸上競技フィールド・モーターボート・十種競技・五種競技・近代五種競技・飛行機競争・ピンポン・スキー・スケート（フィギュア）・高等馬術・体操・ヨット・ゴルフ・競歩。

ラジオは、視覚にたよることができない、聴覚だけで判断しなければならないものであるだけに、聴取者は耳にうったえられるところのもので、プレーを幻想し、想像して、ある形をつくりあげ、攻防の判断を頭の中に仮象して行かねばならない。であるから、攻防の度合がめいりやうでない、耳だけでそれをつくりあげることが不可能になって来る。

攻防の度合がめいりやうであれば、アナウンサーという媒介物を通じて、聴取者の方では、ゲームの進行につれてどん／＼仮象をつくりあげることが出来る。ところが、攻防の度合がめいりやうでないテニスのようなものに例をとってみると、テニスでA選手とB選手が対戦する。A選手がサーブの立場に立ってサーブする。B選手はこれを受けて打ち返す。更にそのボールを取って、A選手は強く敵陣内にボールを打ちこむ。この打ちこむということは、攻めるといふことである。聴取者の方では、攻めているんだ、と思っているが、ところがあにはからんや、A選手の攻めたはずのボールがネットに引っ掛かってしまう。今まで攻める立場にあった者が急に守る、と言っておかしければ、敗れてしまうのである。この急激な変化に、聴取者の頭は容易について行くことができない。こゝに、ラジオに不適當なゆえんがあるのである。もう一つ別な例を引いてみよう。スケートのフィギュアの場合に、競技場に立ったスケーターがしきりと妙技をふるう。われ／＼も、見ていたいへんじやうすだと思ふ。ところが聞いている方の側では、一時にひとりの選手しか競技場に出て来ないために、その選手がじやうすであるか、へたであるかという判断が、一度につかない。十人なら十人の選手が、全部演技をし終って、はじめて採点がなされる。そこまで来ないと、攻防の判断ができないのである。したがって放送の興味はきわめて薄い。

このことは、ショットについても、あるいはトラックやフィールド競技についても言える。砲丸投げをしている。大人の選手が現われて砲丸を投げるのであるが、競技場で見てすらすら、なか／＼判断がしにくいものである。まして、アナウンサーの口を通じて、これが耳に伝えられる場合、はたして、A・B・C・D・E・F、大人の選手のうち、どれが勝っているのか、全然ふめいりようである。ところが野球の場合は、攻める時はあくまで攻撃であつて、守る時は、終始一貫守る立場にある。だから聴取者の側では、聞いていて、攻めるのと守るのとがはっきりする。

これでもいい放送向きのスポーツと不向きなスポーツとの区別が明らかになつたと思うが、このほかもう一、二の條件が加わつて来る。日本では、すもう放送がたいへん好評を博している。そのほかアイスホッケー・バスケットボール・ボクシング・レスリングなども評判がよい。これらは攻防の度合から言うならば、野球やアメリカンフットボールなどにはかなわなけれども、放送の人氣から言うと、それをりようがする場合がある。それは音響効果ということである。背音ということである。スポーツの実況を聞いていて、われ／＼が見ているのと同じような興奮にひたる一つの要素として、背音ということをお忘れることができない。観衆の歓声・拍手、あるいは競技音というものが、われわれを、いながらにしてその場にあるがごとき錯覚におとし入れ、それが放送効果となるのである。ところが、その背音に恵まれている、すもう・アイスホッケー・バスケットボール・ボクシング・レスリングなどは、すべて屋内競技である。屋内競技であるため、マイクロフォンは、比較的容易に且つ効果的に背音をキャッチして、聴取者の耳にその興奮を十二分に伝えるのである。また、速度が早い競技であるから、放送しにくいであろう、放送に不向きであろうということがよ

く言われる。たとえばアイスホッケーであるとか、バスケットボールであるとか。ところが速度に全然関係がないのである。いかにスピードが早いものでも、現在のアナウンス技術をもってこれを表現できないものは、スポーツ種目の中にはほとんどない。むしろ今まであげた条件によつて、放送向きであるか、ないかということが、左右されている。たゞ、もう一つの条件として、あまり視野の廣過ぎるものは、放送に不向きである。ボートレース・モーターボート競争・飛行機競争などというものが、それである。マイクロフォンの置かれた位置を、対象物は一瞬にして過ぎ去つてしまふ。この一瞬しか、攻防の度合を聴取者に伝えることができないのである。視野からほるかに遠ざかつた場合、われわれは、Aが勝っている、Bが勝っているということを表現できない。しかし、この視野が廣過ぎるといふことは、ある程度、技術によつて克服することができる。ボートレースのごとき、レースコースにしたがつて二隻のボートがスタートする。そのうしろから、モーターボートにマイクロフォンを備えつけて、これを追つて行けばよい。そうすれば、レースコースの間、終始一貫、マイクロフォンはAとBとの勝敗・優劣を、はっきり聴取者に伝えることができる。モーターボートにマイクロフォンを載せ、無線中継放送することによつて、現在では、ボートレースを、放送スポーツ中の有力な種目にとり入れている。

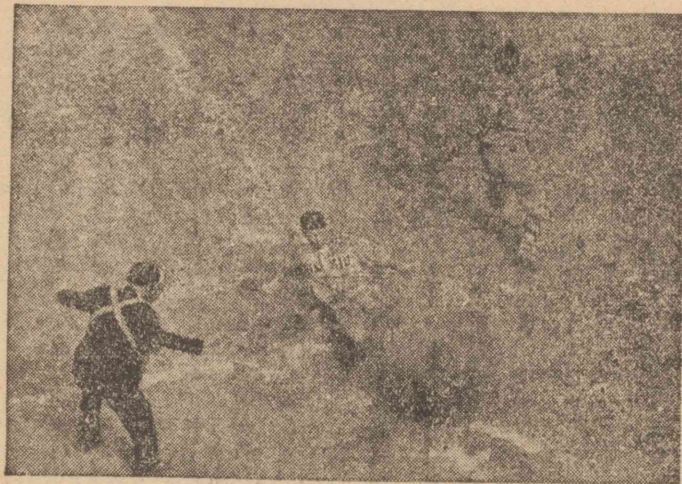
それゆえ、スピードが早いといつても、モーターボート競争でも、飛行機競争でも、今後の技術的條件さえ備われれば、決して放送に不向きではないと、私は考へている。

(放送ばなし)

野球の心理

岡田源三郎

スポーツの中で、野球ほど精神の緊張を必要とする競技はあるまい。ことに、味方が危機に陥った場合、選手は、一瞬たりとも、心身の緊張をゆるめることはできない。自分の一挙手一投足が味方のはたを招く原因になりはしないかという不安——それにうち勝って行く精神の緊張といったような、つまり一個のボールに全精力を集中し、燃焼して行くことが必要なのである。そしてかような不安と緊張とに満ちた場合、たとえ、プレイヤーに、十分な修養と自信があったにしても、どうしても、ある種の精神的圧迫を感じないわけにはいかない。普通に「堅くなる」といわれる過度の緊張がそれで、恐怖観念と言おうか、一種のおくびょう心に近い氣持になりがちなものだ。



おくびょうはいかなる場合にも、野球選手の大禁物であって、どんなすぐれた技倆や頭脳を持っていても、物に動じやすい精神的欠陥のある者は、とうてい大選手たる器でなく、実戦にはあまり信頼できない。むしろ危機の際には、多少技倆は劣っていても、腹のすわった、物におくしないプレイヤーの方が、はるかに役立つものである。

野球の試合は、ある意味で、両チームの間に戦わされる心理戦——「不安へのおとしいれあい」とも見られる。つまりどうすれば、最も容易に敵チームを不安にかつて、自信をかき乱すことができるか、ということだ。これは、実戦上の主要なかけひきの一つであつて、優秀な選手がちょっとしたことから、この詭計に陥つて、とんでもない過失をくり返すことがしばしば見受けられるのである。日によつてプレイヤーに出来不出来のあるのも、こうもた心理的原因によることが多い。

また接戦の際、ゲームの前半にたび／＼ピンチに襲われて、しかもよくはたんを防いで来たチームが、戦いの後半、反対に敵を圧迫して、最後に勝利を得ることが多い。これは、とりもなおさず、一チームがせっかくとらえたチャンスをもむなく逃がしたことが、単に得点上の損失ばかりでなく、一面、失望落胆、焦燥不安といった心理的な打撃となり、かえつて、敵の自信を高めるといふ、氣合上の損失を意味している。

野球ではよく「調子に乗る」ということを言うが、試合ではこの「調子に乗る」ことが何より必要で、ベンチの仕事もつまり、どうすればうまく調子をとらえることができるか、ということに盡きている。敵の調子の出ばなをくじいて自信を傷つけること、そして味方のプレイヤーを調子に乗せて自信を持たせて行くことだ。諸君は、実戦で、たった一本のシングルヒットから調子に乗つて、無名の打者がとつともなく強打をふるつて行くのを見られたに相違ない。事実試合で何がこわいといつて、この調子づいた、ばかの大当たりほどこわいものはないのである。

さて、以上のように、自信や不安の心理が、選手の技倆に非常な影響を及ぼすものであるが、選手の「直感」もまた、ゲームの勝敗に直接の關係を持つものだ。あたかも偉大な發明が科学を基礎とす

る暗示や靈感によって完成されるように、野球の科学的戦術もまた、選手の想像と直感の力によって、真に有効に活用される。名監督はこの「勘」の力によって敵の策戦を看破する。あるいは味方の危機をとつさに予感して、はたんに未然に防ぐ。名投手・名捕手はこの読心術によって打者の裏をかき、打者がいかなるサインを走者に送ったか、スクイズプレーがいつ行われるか、およそこうした消息を、ほとんど誤りなく直感するのである。いかなる戦術も「勘」を無視しては死物同様で、実戦には価値がない。勝敗を分岐するところの危機や好機も、それがすでにやって来てから知ったのではおそいのである。未だ形となつて現われない、人の氣づかない前に予知してこそ、はじめて試合を有利に導くことができるのである。

確かマッシュレーンだと思ふが、どこかでこんなことを言っていた。「野球家は、魔術家のように自己集中力にすぐれ、藝術家・大詩人のように敏感でなければならぬ。そしてまた、小兒のようにむじゃきで、且つ大胆でなければならぬ。」と。全くその通りである。決して野球選手に深遠な心理学が必要だというのではないが、「勘」の鈍い者には、野球のようにスピーディーな複雑な競技を、満足に果たして行くことはできないのである。

敏感で、自信が強くて、むじゃきで、大胆で、精神の集中ができて——少なくとも、こうした素質を持たなければ、野球の名手にはなりえないのである。

(監督の心裏)

研究

一 野球の放送を実際に聞いて、その情景を頭

の中に描いてみよ。バットの音、観衆のどよ

めきなどの音響効果を、どう感じるか。

二 テニス、スケートのフィギュアの、放送しにくいわけを考えよう。

四 野球の心理は、すもうやテニスなど、ほか

のスポーツにあてはまるか。

三 野球で「調子に乗る」とは、どういうことを言うのか。

五 どんなスポーツが一番好きか。どういう点が好きか、話しあおう。

〔三〕笑 い 話

笑わせた写真

夏目漱石

電話口へ呼び出されたから、受話器を耳にあてがって、用事をきいてみると、ある雑誌社の男が、私の写真をもらいたいのだが、いつとりに行っていいか都合を知らせてくれろ、と言うのである。私は「写真は少し困ります。」と答えた。

私は、この雑誌とまるで関係を持っていなかった。それでも、過去三、四年の間に、その一、二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりをたくさんのせるのが、その特色だと思つたほかに、今はなにも頭に残っていない。けれども、そこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に與えた不快の印象は、いまだに消えずにいた。それで、私はことわろうとしたのである。

雑誌の男は、卯年の正月号だから、卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は、先方の言う通り、卯年の生まれに相違なかった。それで、私はこう言った。

「あなたの雑誌へ出すためにとる写真は、笑わなくなつてはいけないでしょう。」

「いえ、そんなことはありません。」と相手はすぐ答えた。あたかも、私が今まで、その雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「あたりまえの顔でかまいませんなら、のせていたとしてもよろしゅうございます。」
「いえ、それで結構でございますから、どうぞ。」

私は、相手と期日の約束をした上、電話を切った。

中一日置いて、打ち合わせをした時間に、電話をかけた男が、きれいな洋服を着て、写真機を携えて、私の書齋にはいつて来た。私は、しばらくその人と、かれの従事している雑誌について話をした。それから、写真を二枚とってもらった。一枚は、机の前にすわっている平生の姿、一枚は、寒い庭先の霜の上に立っている、普通の態度であった。書齋は光線がよく通らないので、機械をすえつけてから、マグネシアを燃やした。その火の燃えるすぐ前に、かれは、顔を半分ばかり私の方へ出して「お約束ではございますが、少しどうか、笑っていただけますまいか。」と言った。私は、その時、突然かすかなこっけいを感じた。しかし、同時に、ばかなことを言う男だといふ氣もした。私は「これでよいでしょう。」と言ったなり、先方の注文には取り合わなかった。かれが、私を庭の木立ちの前に立たして、レンズを私の方へ向けた時も、また、前と同じようなていねいな調子で「お約束ではございますが、少しどうか……。」と同じことをばをくり返した。私は、前よりも、なお笑う氣になれなかった。

それから四日ばかりたつと、かれは郵便で、私の写真を届けてくれた。しかし、その写真は、まさしく、かれの注文通りに笑っていたのである。その時、私は、あてがはずれた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私には、それが、どうしても、手を入れて笑っているようにこしらえたもの

のとしたか、見えなかったからである。

私は、念のため、家へ来る四、五人のものにその写真を出して見せた。かれらは、みんな、私と同様に、どうも作って笑わせたものらしいという鑑定をくださった。

私は、生まれてから今までに、人の前で、笑いたくもないのに笑って見せた経験が、何度となくある。その偽りが、今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

かれは、氣味のよくない苦笑をもらしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真をのせると言った雑誌は、ついに届けなかった。

(硝子戸の中)

音楽家の頭

薄 田 泣 菫

バデレフスキーといえば、ポーランドの聞いた音楽家だが、米國に渡った時、ある日、ボストンの停車場で、汽車を待ち合わせていたことがあった。音楽家は、シヨバンの楽譜でも踏むような足つきをして、プラットホームをあちこちうろついていた。

十二、三のちんびらな小僧が、ものかげからとび出して、この音楽家の前に立った。

「だんな、みがかせていたじきましようか。」

バデレフスキーは立ちどまって、だまって小僧を見おろした。小僧は、手にくつばけをさげている。まがう方もなくつみがきで、だい／＼のように小さな顔は、くつ墨でまっ黒によごれている。

音楽家は、ズボンのかくしから、銀貨を一つ取り出して、てのひらにのせた。

「くつはみがなくなるともいい。おまえの顔を洗っておいでよ。そうしたらこの銀貨をあげるから。」



家のてのひらにそれを返した。

「だんな、銀貨はこのまゝおまえさんにあげるから、これで散髪をおしよ。」
パデレフスキーは、驚いて額をなでてみた。なるほど、帽子の下から、長い髪の毛がはみ出している。それは、音楽家のじまんの髪の毛だった。

(茶話)

江戸笑話

わが國には昔からいろ／＼なこっけいな話が傳わっているが、特に江戸時代に入ると、笑話がかさかんに作られ、人々はこれを読んだり、聞いたりして、喜んだものである。本課には数多い江戸笑話の

中で、最もはやく出た「醒睡笑」と、全盛期の代表作である「鹿の子餅」「壽々葉羅井」とから一話ずつ選んだ。こういう笑話が、落語のもとにもなったのである。

むらさき

若い者四、五人集まり話してゐるところへ、またひとり友だち來たり、「これ／＼、珍しい木を見て來た。」「何だ。」「どんな木だ。」「木もむらさき、葉もむらさき、花もむらさき、実もむらさきの木だ。」「む、そりやあ珍しい木だ。」「何といふ木だ。」「何とか名はいったつけ、忘れた、行つて聞いてこよう。」「とかけたし、しばらくして來たり、「聞いて來た、聞いて來た。」「何といふ木だ。」「なすび。」「

(壽々葉羅井)

無筆

「物まう。」「どれい。」「北佐野三五右衛門お見舞申します。」「けふはだんなまかり出ましてござります。」「しからはお玄関帳へしるされ、お歸りの時分よろしう仰せ上げられてくださるませう。」「いや、わたくしは無筆でござります。そこもと様御自筆に、帳面へお書きなされてくださりませ。」「拙者も無筆でござります。」「はて、困つたものだなあ。」「しからはかういたませう。」「どうなされます。」「参らぬふんになされてくださいなれ。」「

目じるし

ひなより主従ふたりはじめて上落し、宿に休息の後、見物にいづる。下人にむかひ、「都はいづれも同様なる家作りなり。よく／＼目じるしをせよ。」と教ふる。「心得たり。」と領承せしが、晩にのぞみ、宿を知らず。主、腹を立てしかる。返事に、「いや門の柱につばにて書きつけを、確かにつかまつ

りしが、消えて見え候はず。その上になほ念を入れ、屋根の上にとびの二つありしを目つけにしたりしが、それもいな事で見えぬ。」と。
(醒睡笑)

研究

- 一 「笑わせた写真」の中で、「笑う」ということをさがせ。
- 二 雑誌の男は、なぜ、作者に笑ってくれと頼んだか。
- 三 人は、おかしくないのに、笑うことがあるか。どんな場合にそうするか、考えよう。
- 四 「音楽家の頭」の小僧は、なぜ、銀貨を音

樂家に返したか。一度読んだきりで、考えてみよう。

- 五 「無筆」で、取次が、來客に対して、自分の主人のことを言うのに、敬語を使うが、これは、客に対する礼儀上、適當であると思ふか。このころの習慣についても考えよ。
- 六 「目じるし」を、口語文に書き改めよ。

〔四〕私の読書

村岡花子

少女のころに読んだ雑誌は、少女世界。けれど、それよりも、小波山人の世界おとぎばなしの方が、はつきりとした印象を残している。

幾つのものであったか、十歳ぐらいいでもあったらうか、「本を読んだ。」というはつきりした意識をもって、読みおえた一冊があった。「ミルトン失樂園」と表紙に書いてあった。あまり厚くない、紙表紙の本で、散文体で書いてあったが、子供が読んでおもしろいものでなかったのは、もちろんである。

この本は、私にはわからなかった。わからないせに、何か、たいへん読みごたえのものに感じられた。

その次には、クリスマスカーオルの抄訳ものを読んだ。クリスマスカーオルという原名は、本の表紙に、出ていなかった。何という標題になっていたか、全く記憶がない。それでいて、内容は、非常に強く、幼い心を打った。スクルージとジムの名と、幽霊が重い鎖を引きずって歩くくだりが、いつになっても忘れられなかった。

専門学校で、英文学の第一時間めに、先生が、バラダイス・ロストの最初の一行を朗読した瞬間、「あっ、これだ。小さい時に読んだのは、この詩の物語だった。」とさとした。その時のうれしさは、ちょっと簡単には説明のできない感じであった。長い旅をしていて、思いがけない時に、思いがけない所で、遠い以前にたつた一度会ったきりで、しかも不思議に忘れられなかった人にめぐり会った喜び、とでも言ったら、あの時の氣持がいくぶん表わせるかもしれない。

その時分、私は、佐佐木信綱先生のところへ入門した。はじめて先生のお宅へあがった日に、森鷗外訳の「即興詩人」を貸してくださいました。翻譯の美しさというものを私が感じたのは、「即興詩人」を読んだ時がはじめであった。それ以前には、黒岩涙香訳の「噫、無情」だの「巖窟王」だのに夢中になっていたけれど、たゞ、筋のおもしろさに魅せられてしまつて、文章を味わおうとはしなかった。

学校の図書室に、英書がたくさんあったので、寄宿舎生活の十年間には、かなり大量の読書をした。父が濫読を戒めるのと、英文学の主任教師が、系統を立てた読書のしかたを奨励するのと、この二つの影響から、小説を読むにしても、ひとりの作家を読みはじめると、ずっと続けて同じ人の作品を讀

み盡くすという傾向が、私のうちにできあがった。これは今でも同じである。学生時代から今日に至るまでの間に、非常に強い感化を受けたものとして、テニスンテニスンの「インーメモリアム」がある。その中の数箇所は、いまだに暗誦あんじゆできるほどで、私は、この詩を、何十回となく愛誦した。友情の最高の状態を描き出したものであり、テニスンが、盟友ハラムのために打ち建てた、不滅の記念碑である。

(母心抄)

研究

- 一 読書のしかたには、狭く深く読む方法と、広く浅く読む方法とがある。作者は「インーメモリアム」および学校の図書室の本を、どちらの読み方で読んだか。
- 二 作者のその読み方をどう思うか。
- 三 自分たちがおもしろく読んだ本について、話しあおう。
- 四 世界の名作には、どんな本があるか。先生やほかの人たちに聞いたたり、調べたりして、読むようにしよう。

二 美しい自然

われは、美しい自然のふところ^{ところ}にいだかれて生活している。自然の中にはいつて、いこいの一時^{ひととき}を楽しむこともできるし、自然のたくましい生命力を、からだじゅうに吸いこんで、われは成長に資することもできる。しかし、やゝもすると、自然の美しさに

慣れてしまつて、すっかり無関心になつてしまふことも、少なくはない。

「やぎの群れ」は少女の見た、山の牧畜生活、「あけぼのの富士」は海上から見る富士の美しさを描き、「春の日」は、歌人がうたった自然の美しさである。都市は、自然からはなれているように見えるが、「都市の表情」では、この二つが、切つても切れない関係にあることを教えてくれる。自然は、山にも、水辺にも、都市にも、それゝ独得の美を興えているのだ。

自然を書いたすぐれた文章はこのほかにも多いが、われはこれらを通して、自然の見方、感じ方を深く考えてみよう。そうして、もっと自然に愛情を寄せ、その美しさに目を開くようにしたい。

〔一〕やぎの群れ

ヨハンナリスピリ

本課は、スイスの女流作家ヨハンナリスピリ(一八二七—一八九一)の作品「ハイジ」の一部で、「アルプスの山の娘」という題で邦訳がある。原作は一八八一年に書かれ、アルプスの山に住む清纯で、そびやかな子供たちの生活を描いている。ハイジは両親のない五つの子で、アルムおじさんというとしよりに引き取られたばかりである。おじさんは無愛想なひとりものだが、ハイジには親切である。やぎ飼いの子ペーテルも元氣のよい少年で、やぎという遊び相手もあり、大きく美しいアルプスの山が、朝夕やさしくかれらを包んでくれている。これからハイジの山の生活が始まる。

アルムおじさんの山小屋に着いた翌朝、ハイジは、ペーテルの高い口笛で目をさました。まく

ちもとの窓から降る太陽の光線で、寝床や、枯れ草の束や、そのほか屋根べやじゅうのものが、金色に輝いていました。ハイジは、びっくりしてあたりを見まわしながら、外でペーテルと話しているおじさんの声を聞くまでは、自分がどこに寝ているのか、わかりませんでした。今まで町のごみ／＼した中で育ったハイジは、きのうからのいろんな珍しいことを思い出すと、急に寝床からとびだし、一分とか／＼しないで着替えを済ませて、小屋の外へかけだしました。

「ハイジ、おまえも、やぎといっしょに山へ遊びに行くかい。」

アルムおじさんに言われて、ハイジはあんまりうれしくて、返事の代わりに、はねかえりました。

「でも、まあ、顔を洗って、ちゃんと身じまいをしなけりゃ、お日様に笑われるよ。あすこに、みんなそろえてある。」

小屋の入口に、水のいっぱいはいったたらいが、置いてありました。ハイジが、その水で顔を洗ったり、からだをふいたりしている間に、アルムおじさんは、ペーテルに、弁当袋を持って来いと言いました。何にするのかと思いつながら持って行くと、アルムおじさんは、パンの大きなきれと、それに負けないくらいのチーズを入れてくれたので、ペーテルは目をまるくしました。

「あと、おわんを入れるよ。あの子はおまえみたいに、やぎの乳首からじか飲みはできないからね。お弁当を食べる時、このおわんに二はいほど、乳をしぼってやってくれ。岩から落っこつたりしないように、よく気をつけてやるんだよ。じゃ、行つといで。」

ハイジは大喜びで出かけました。頭の上には濃緑の空がひろがって、そのまん中に太陽が輝いていました。花という花が、青々とした山の斜面に白いコップや、黄いろいコップを並べていました。ハイ

ジは花から花にとびまわるし、やぎはやぎで、すきな方へかけだして行くので、両方の番をするペーテルは大骨折りでした。

「どこへ行ったの、ハイジ。」ペーテルは時々彼女を見失って叫びます。

「岩から落っこちるとたいへんだぜ。」

「だいじょうぶよ。ペーテル、こゝにいるのよ。」

ハイジは、花におゝわれたまるい丘のすそに、いい気持で寝ころがっているのです。花のかおりに満たされた空気を吸いこむと、ハイジは今までこんないいにおいをかいたことはないような気がしました。

「こつちへおいで。」

ペーテルは再び呼びます。

「岩から落っこちちゃたいへんだぜ。アルムおじさんに言いつかって来たんだから。」

「岩なんて、ないじゃないの。」

ハイジは花の中から動こうとしませんでした。

「登ろうよ。ね、もつと登らなきゃならないんだぜ。さあ、頂上へ行くと、猛鳥が鳴いてるよ。」

だん／＼登って行くと、一面やぶになって、ところどころにもみの木の立っている廣場へ出ました。ペーテルは毎日こゝでやぎを遊ばせるのでした。ちょうど高い岩のすそになっていて、岩の向こう側には、木一本ないけわしい山々がそびえていました。ペーテルは弁当袋をおろし、風に吹き飛ばされないように、地面のくぼんだところに置きました。ハイジも前かけをはずして、みち／＼摘みためた

花を大事にくるんで、弁当袋の横に置きました。うちに持って帰り、枯れ草の束にさして、自分の屋根べやの寢室を、その牧場みたいになしようと思つたのでした。

谷は、朝日に洗われて、遠く下の方に横たわっています。すぐ前には、ひろくした雪の野原がひろがっているし、左の方には空を突き通すほどの高い峰がそばだつて、その峰の両側には大きな岩が積み重なっています。ハイジは身動きもしないで、その景色にながめ入りました。どこまでも美しいとして、いる中に、たゞかすかに風の音がして、そのたびに、青い花の小さい鈴や、うつば草の輝かしい金色の冠が揺れて、その細い茎でうなずきあいます。ペーテルは、疲れてうとうととして、やぎは、好き自由にやぶの中を歩きまわります。ハイジは、今まで、これほど楽しい思いをしたことはありませんでした。

やがて、ペーテルは、突然口笛を吹きだして、いつまでも高く吹き続けました。やぎたちは、ちゃんとかれの声を聞きわけ、次々に岩の方からおりて来て、みんなその牧場に集まり、露けの多い草をなめたり、あちこちうろついたり、お互どうし角でつきあいつこしたりしました。

ハイジはとびだして行って、やぎの中をかけまわりました。やぎがじゃれると、いっしょにじゃれました。やぎにはどれも特長があつて、ひとりひとり人間みたいな氣がするので、ハイジは一匹ずつ、人間にする通りにあいさつして歩きました。その間に、ペーテルは、くぼみに置いてある弁当袋の中から、パンとチーズのきれを取り出し、大きい方の二つをハイジに、小さい方の二つを自分にと、正方形に地べたの上に並べました。それから、持って来たおわんを出し、白いやぎからうまい新鮮なお乳をしぼりこみ、それをお弁当の並んでいるまん中にすえました。このしたくができてから、ハイジ

を呼びました。でもハイジは、新しいやぎのお友だちとの遊びに夢中になり、ほかのことは、耳にも目にもはいらないので、ペーテルは、やぎを呼び集めるよりも骨が折れました。かれが岩という岩がひびき渡るほどの大声で呼んだので、ハイジはやつとやぎの群れから出て来ました。

「もう御飯だから、とびまわるのはおやめだ。さあすわつておあがりよ。」

ペーテルに言われて、ハイジはすわりながら、お乳のはいつたおわんを見て、うれしそうに尋ねました。

「これ、わたしのお乳なの。」

「そう。それからね、そつちの大きいふんのパンとチーズがハイジのお弁当だ。お乳は飲んじまつたら、もう一ぱいしばつてあげるよ。」

「ペーテルは、どのやぎのお乳を飲むの。」

「ぼくは、あのぶちやぎのお乳を飲むさ。」

ハイジはパンを裂き、それにチーズの大きなきれをつけて、ペーテルにさし出しました。

「これ食べてよ、ペーテル。わたしはもうたくさんだから。」

ペーテルはびっくりしてことばも出ませんでした。これまでだれも、こんなやさしいことを言ってくれたことも、してくれたこともなかったのです。かれは、はじめは、ハイジがじょうだんを言っているのだと思つて手を出しませんでした。でもせひ食べてくれと言われて、かれはやつと受け取り、お礼を言いました。ペーテルは、やぎ飼いになつてからこのかた、今までにないおいしいお弁当を、おなかいっぱいつめこみながら、ハイジにやぎたちの名まえを敬えてやりました。よく氣をつけて見

ると、どのやぎにも、いくらか特長があるので、ハイジも、ペーテルが一匹ずつ指さして教えてくれるやぎを見分けて、名まえをあてることができるようになりました。

角の大きなやぎは「トルコ人」という名まえでした。このやぎはたえず仲間に向かって、ほかのやぎたちは、かれが来ると逃げだしました。「ひは」という名まえのついた、ほっそりした小やぎだけは、たいへん勇敢で、その「トルコ人」に立ち向かって行きます。ひどくすばしっこく、続げざまに三、四度も突っかって「トルコ人」をぎょううてんさせ、二度と手出しをさせないようにします。「ひわ」はいくらでも戦うという様子を見せている上に、その角がまた非常に鋭いのでした。「ゆき」という名の、小さいまっ白なやぎは、なんとなく悲しそうな、ものをさがすようなふうをして鳴いているので、ハイジはなんべんもそばにかけより、頭を抱いて慰めてやりました。

「どうしたの。なんだって、そう悲しそうに鳴いてるの。」
やぎはうちあけ話でもするかのように、ハイジに耳をすり寄せ、それからまた、鳴きながら行ってしまいました。

ペーテルは、バンとチーズのおいしいお弁当を、まだゆっくり食べながら、高い声で話して聞かせました。

「そのやぎがそんなに鳴くのはね、ハイジ、知ってるものがないくなったからだよ。そのやぎはおとしい町へ賣られちゃったから、もう山に来ないんだ。」

「知ってるものって、だれなの。」

「きまつてるじゃないか。そのやぎのおかあさんさ。」

「じゃ、おばあさんはどこにいるの。」

「おばあさんなんかあるもんか。」

「おじいさんは。」

「おじいさんもないさ。」

「まあ、かわいそうだわねえ。」

ハイジはまたそばに寄って来た「ゆき」をやさしく引き寄せました。

「でも、もう鳴かないでおいで。おかあさんの代わりに、わたしが毎日登って来てあげるからね。」
小やぎはハイジのことばがわかったように、その肩に、また頭をすりつけました。

夕方が近づくと、太陽は山々のうしろへ沈みかけました。ハイジは牧場の草から、花から、遠い岩のかど／＼まで、急に金色の光りに包まれたのを見て、驚いて叫びました。

「ペーテル、ペーテル、火事になったのじゃない。みんな燃えてるわ。岩がまっかよ。雪の原に火がうつってるわ。もみの木も燃えて立ってるわ。山じゅう火事よ。」

「いつだって、こうさ。」

ペーテルは落ち着きはらって、むちの皮をむいていました。

「ほんとうの火事じゃないよ。」

「じゃ、なんなの、ペーテル。」

「なんだか、ひとりであんなことになるだけさ。」

「そう。あら、今度はばら色になったわ。あの雪の山を見なさいよ。ほら、あの一番高い岩の山を。」

—あれ、なんて山なの。』

『山の名まえなんかあるもんか。』

『あら〜、雪がまっかになつたわ。上の岩山のところには、ばらがどっさりあるわ。ねえ。——まあ、だん〜灰色になつちまうわ。みんな消えてなくなるわ、ペーテル。』

ハイジの心配そうな顔を見て、ペーテルはあすもまた夕方になれば、山は赤く燃えるのだと話して聞かせました。

『さあ、お立ちよ。帰るんだ。』

かれは鋭い口笛でやぎたちを呼び集めました。

『じゃ、牧場に登って来れば、毎日でも見られるのね。』

『見られるとも。』

ハイジはペーテルといっしょにやぎについておりながら、あすから欠かさず登って来ることにしようと思ひました。
(アルプスの山の娘—野上彌生子訳)

研究

- 一 本課を、何分間で読めるか、測つてみよう。
- 二 アルムおじさんが、弁当袋に、パンとチーズを入れた時、ペーテルは、なぜ、目をみはったか。
- 三 「ゆき」は、なぜ悲しそうに鳴くのか。
- 四 アルプスの夕焼けの美しさを書き抜いてみよう。
- 五 ハイジが、あすから、欠かさず登って来よう。

うと思つたのはなぜか、そのわけを考えよう。

六 ハイジは、どういう性質の子だと思ふか。

みんなで話しあおう。

七 アルプスは、どこにあり、どういう山か調べよう。

〔二〕春の日

子供らとてまりつきつゝこの里に遊ぶ春日は暮れずともよし

良 寛

吹く風に動く菜の花音もなく丘べしづけき朝ぼらけかな

大隈言道

たのしみは野寺山里日を暮らし宿れと言はれ宿りける時

橋 曙 寛

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ会ふ人みなうつくしき

與謝野晶子

黄のてふの林に住むはかそけかり落葉松も芽ぶきそめにし

北原白秋

うす紅く雪に流れて入日影曠野の汽車の窓を照らせり

石川啄木

つけすてし野火の煙のあか〜と見えゆくころぞ山は悲しき

尾上柴舟

幾山河越えさりのゆかば寂しさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

若山 牧水

おり立ちてけさの寒さを驚きぬ露しと〜とかきの落ち葉深く

伊藤 左千夫

水打てば青ほゞづきの袋にもしたゝりぬらむたそがれにけり

長塚 節

山にして遠裾原に鳴く鳥の声のきこゆるこの朝かも

島木 赤彦

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並みよろふ山

斎藤 茂吉

くすの花踏みしだかれて色あたらしこの山道を行きし人あり

釈 迢空

人遠くゆきて帰らず秋の日の光しみ入る石だたみ道

佐佐木 信綱

花びらのにほひ映りあひくれなゐのぼたんのおの奥のかゞよひの濃さ

木下 利玄

研究

一 春の歌と秋の歌とそれ〜幾つあるか、数えてみよ。

七音を八音に、ふやすことがある。これを、字余りと言う。字余りの歌をさがして、その

二 短歌は、五七五七七の三十一音が標準であるが、調子を高めるために、五音を六音に、

効果を考えてみよう。三 どの歌が一番好きか、話しあおう。

〔三〕 あけぼのの富士

小泉 八雲

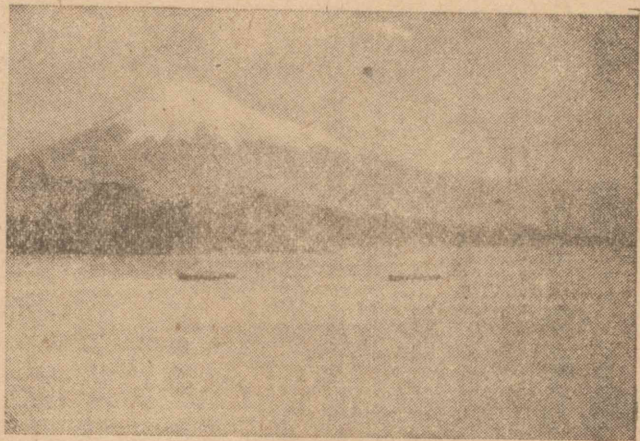
小泉八雲は本名をラフカディオ・ヘルンと言ひ、一八五〇年ギリシアに生まれ、アメリカで新聞記者としていたが、明治二十三年（一八九〇）日本に来て、のちに帰化し、小泉八雲と名のつた。かれを文学者として最も有名にしたのは、日本に関する諸作品である。その作品は印象記・旅行記・論文・隨筆・小説・物語等と各方面にわたっており、その魅力のある文章は、世界に多くの日本びいきを作ったといわれている。明治三十七年五十五歳でなくなった。

日の出の少し前、雲のない四月の朝の透き通る暗さをすかして、かれは再び故國の山々を見た。黒い海の上に紫紺色にそびえ立つ、遠く高い連山を見た。かれを長い異郷の旅から連れ帰りつゝあつた汽船の後方では、水平線が徐々にばら色の光で染められて行つた。甲板の上にはすでに若干の外人が、太平洋上のあけぼの富士の、またなくうるわしい姿を見ようと待ちかまえていた。

かれらは長い山脈のうねりを見つめた。そのぎざぎざした連峰のかなたの深い夜をのぞいた。そこにはまた星がかすかにまたゝいていた。——しかし、富士の姿はどこにもない。

〔三〕 あげぼの富士
その時ひとりの船員が叫んだ。

三十二



「あ、あなたがたは目のつけ所が低過ぎます。もっと高い所をごらん下さい。もっと高い所を。」と。かれらは高く、空のまん中近くまで目を上げた。そのせつな、あげぼの色で幻の蓮華のつばみのようにうすあかく染まった、偉大な山頂が目にはいった。その壯観にかれらは沈黙してしまった。太陽の光線が、地球の丸みを越え、暗い山脈を越え、一見、星までも越えて山頂に達すると、万年の雪は見る／＼黄金色に変わり、白色に変わる。

夜は明け離れた。柔らかな青い光が一天にみぎり、すべての色彩は眠りからさめた。人々の眼前には明かるい横浜の港が開けて来た。そして、ふもとの見えぬこう／＼しい峰がたゞ一つ、雪の精のように大空に高くかゝっていた。

長い旅路のちに再び故國の土を踏もうとしているかれの耳には、さっきの「あ、目のつけ所が低過ぎる。もっと高い所を——もっと高い所を。」という叫びが、胸の中にむくむくと押し上げて来る情緒に伴なって、一種の節奏をなしてまだくり返されていた。(心)

研究

一 作者は富士のどんなところに美しさを感じたのであろうか。

二 「もっと高い所をごらん下さい。」という船員のことばは、本課では重要な役割を果している。それはどんな役割か。

三 「やぎの群れ」のアルプスの風景とこの富士の景色とどう違うか。また自分たちの経験した自然の美しさについて、文章を書いてみよう。

〔四〕 都市の表情

神戸

津村秀夫

私は神戸に生まれて、神戸に育った。三年間の高等学校生活を鹿兒島で送り、大学生活の三年間を仙台で過ごしたのである。そうして社会に出るからの約十年間を、東京で暮らして来ている。

昨今でも、年に二、三回は帰省するが、いつも、阪神沿線の車窓からながめて感ずることは、大甲山脈のあのなだらかな、年若い女性の膚を思わせる、山の線の美しさである。今では、その山麓にいろいろの学校が築かれている。春の盛りには、その山脈を背景に、美しい菜の花畑が、陸続と車窓に見える。夏の六甲山脈の緑もまた、美しいものである。ほとんど險しさ鋭さというものがなく、太陽の恩恵を十分うけて、海に向かって静かに眠っている。

夜の港で、船の上からながめた神戸市の燈火は、ちよつと香港を小さくした気分だ、と言った人がある。が、山の手から海をながめた場合の、廣々と開放的な気分も、恍惚とさせる。ことに、瀬戸内

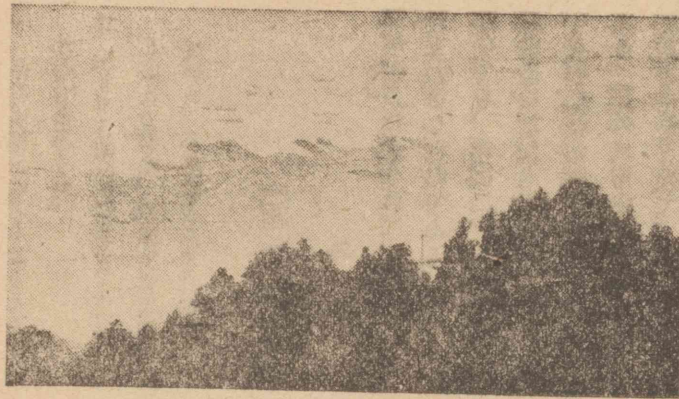
二 美しい自然

三十三

海を遠くにながめる春の海は、悠然としてゐる。こういう地形と、こういう風土に恵まれた神戸は、貿易港としても、商業都市としても、早くから文明の恩沢に浴したのであろうが、何しろ全く傳統や歴史のにおいのない、いくぶん異國情緒のする都市である。神戸という都会は、諸地方から集まって来た各縣人の植民地的な集合地で、近畿三都の中では最も開放的であり、コスモポリタンでもあるが、その代わり文化としては、雑然としてゐるのではあるまいか。いわば、安っぽい新開地文化である。私はこの地に十七、八歳まで生活したわけであるが、私の得た体験で言うと、要するに自然の恵みと外國への憧憬との、この二つのみであったように思う。青少年時代の私は、この故郷になんの愛着もなかった。むしろしばしば嫌悪を感じた。そうして私の得た收穫というのは、反動的に、海のかなたへのあこがれであった。私は、西欧文明へのあこがれにかり立てられ、幼い心を燃やしていた。

鹿兒島

神戸において自然の恵みを体験したはずの私も、実はそれを意識しなかった。魅力も感じなかったが、鹿兒島の自然と風土には全く魅惑され、感動を受けた。この都市がまず私をひきつけたのは、歴史と傳統のにおいである。

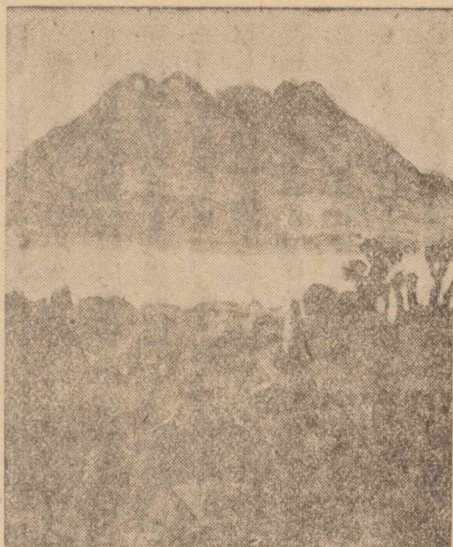


神戸港

幼少年時代を通じての体験に最も欠いていたものを、私は、この由緒ある城下町の三年間の生活で、ぞんぶんにむさぼり食った。城山や、今は七高造士館になっている鶴丸城址、さては旧島津家の御殿のある磯の浜など、いまだにそれは私の中に鮮明な形で残っている。

櫻島の朝

梅原龍三郎筆



また、櫻島を中心とする自然の豪快が、私を強く打った。櫻島は、朝夕の時間的変化によって、さまざまに複雑な色彩で山膚が色どられる。私はよく、城山の鬱蒼たるくすのきの大樹のかげから、この櫻島の色彩的変化を享受したが、それはきわめて陰翳に富んだ色彩であった。私は、朝夕、この島の山容に威圧される自分を感じたが、それはもう、六甲山脈や阪神地方の風景のように柔和なものではなく、十分に自然の威力を示すに足るものであった。

鹿兒島の風土は、おそらく日本國じゅうでも、最も快適なものの一つであらう。ほとんど雪を見ることもなく、春はまたきわめて南國的に濃厚な春である。春から夏への季節が一年じゅうの大半を占め、冬などはほとんど意識されない。しかも、鹿兒島の夏は苛烈ではあるが、からりとかわいていて、こちよよい夏の爽快味を持つ。

いずれかといえば、鹿兒島は人生を享樂し、自然を享樂すべき土地である。ゴッホの絵に見るよう

二 美しい自然

な燃え上がる生命力に満ちている。こういうのどかな風土に恵まれた鹿兒島に、なほ維新の業に参画するような人物たちが多数輩出したのであろうか。むしろ不思議な氣持もさせられる。思うに、鹿兒島の風土は、およそ思索や冥想に適さないのではあるまいか。けれども、鹿兒島の町は、その開放的な地形と、常夏といわれる風土の陽性性によって、とにかく人間の感情生活に、ある規模の大きな振幅と、激情性とを與えることは確實のようである。

鹿兒島の文化にとって、大きな痛手は、いうまでもなく西南の役である。この戦乱によって薩摩のすぐれた青壯年の種は断絶したのではないかと見る論者もいるようであるが、そういう事情のほかに、明治以後は外國との交通がなくなった関係もあって、鹿兒島は文明や文化に立ち遅れを取ったのであろう。徳川末期には、最も欧州文明に接触しやすい地理的優位を持っていたこの大藩が、明治以後は、むしろ中央の文明に最も遠い地位に置かれてしまった。そうして商工業の勃興しない事情が、都会の發達を妨げている。けれども、鹿兒島は福岡や神戸に比し、はるかに文明の恵みを受けずに、その古色を保っているだけに、こゝには傳統の色が濃いのである。私は少なくとも神戸において感ずるよりも、より以上にこの都市に純粹な文化感覺を感じた。東京や京都のように文明と文化のバランスが取れている都会ではないが、粗野な鹿兒島は歴史的傳統のにおいを失わぬところに、純粹な文化感覺もあるのである。都市文化というものは、單なる文明と違って、その土地の歴史的感覺の裏打ちなくしては、私にはその價値が考えられない。

仙 台

神戸や鹿兒島で自然の恵みに浴した私は、仙台に来て、まず東北の自然のきびしさに目をみはった。

こゝでは、世界は全く一変している。人間は自然と戦わねばならない。仙台は、日本海方面や北海道と違って、日本の北方地帯の中では、まだしも溫暖な土地であらう。しかも、この都会においてすら、一年の半分は寒冷の季節である。鹿兒島では二月の末に櫻を見ることがもまれてないが、仙台の花は四月の末である。神戸では、二月の末にはもう春寒の情調を持つが、仙台は、三月ですら雪が降りしきる。春をおぼえるのは、ようやく四月の中旬過ぎである。春はきわめて淡く短く、いつしか青葉の五月に移り変わって行く。かつこうが鳴くころになって、ようやく自然の脅威から救われた解放感を覺えるのである。

仙台の印象は、一口に言えば、自然の重圧感から来る陰氣である。毎年、の眞夏には、いつも仙台を離れるのを常とした私は、仙台の夏を知らないが、おそろしく美しくさわやかな五月の季節のみが仙台の生命であらう。仙台は森の都といわれ、日本のアルト・ハイデルベルヒなどもいわれる。それは仙台の青葉の季節をたゞえることばである。

仙台もまた、鹿兒島と同じく由緒ある城下町であり、その町の区画や、家並みにもどこが大藩の城下町らしいおもしろい氣分はみなぎっている。けれども、傳統や歴史においては、鹿兒島に比して希薄なように思われる。伊達家の青葉城址の下を廣瀬川が流れていて、風景として、このあたりが最も美しいのだが、廣瀬川そのものが、やはり東北の風土を感せしめる、荒涼たる風趣を漂わしているのである。とにかく、鹿兒島が、城山だの、櫻島だの、磯の御殿だのを持っているのに比べると、仙台の風物は單調である。歴史の刻印をさがし求めるのにも不便がある。

けれども、仙台の冬は——というよりも仙台の雪は、美しいものである。東京の冬のようにからっ

風に襲われない仙台の冬は、静かな雪の情緒に包まれて、陰鬱ではあるが、決して酷烈や苦痛を感じしめない。仙台は、決して日本海方面のような雪國ではないから、人間の生活を萎靡沈滞せしめるほどのものはないが、いくぶん活気をそがれているとは言えよう。幸いなことには、その冬を越すと、すばらしい青葉の季節が訪れる。仙台の向山から俯瞰した市街は、實際森の都と呼んでよい絶景であり、学都のにおいを感じしめるに十分なものがある。これだけ樹木に包まれた静かな都会は、日本じゅうにもまれなのではあるまいか。

私は鹿兒島で自然の偉大な美しさに官能を陶醉せしめられたが、同時にこの都会は思索に適さない町であるとも意識された。鹿兒島の自然は、人間の感覚を享樂せしめるが、知性に訴える力を持っていない。仙台の自然と風土は寒々としていて貧しいが、清爽であり、鋭さがあり、思索にはふさわしい。もし、思索の季節というものを持った都会がありとすれば、それは五月の仙台においてまず発見されるに違いない。

私は、青春のころを鹿兒島の南國に送ったことを誇りとしているが、同様に学生生活の後半を、静かに落ち着いた雪と青葉の仙台に送ったことを、生涯の誇りとするのである。少なくとも、大学生活を東京で送らなかつたことを、私は非常な幸福だと考える。

(青春の回想)

研究

- 一 神戸は、どういう性格を持つ都市か。
- 二 鹿兒島と仙台との、風土を比較してみよう。

三 作者は、三つの都市からそれ／＼何を得たと云っているか。

- 四 三つの都市のうち、どこに住んでみたいか、

文章に書いてみよう。

三 空想のつばさ

きみたちは、「かぐや姫」の話を聞いて、夜空を仰ぎながら、月の世界を心に描いたことがないだろうか。空想の世界に遊ぶのは、楽しいばかりでなく、われ／＼の心を、清く大きくするものである。一方にまた、すぐれた発明や発見が、空想から生まれた例も少なくない。鳥のように空を飛びまわる空想が、飛行機の発明のもとになったことは、だれも知っている事実である。

「てんぐ笑い」には、てんぐを友だちにしてしまふ、人なつこい子供たちが出て来る。

「風の又三郎」は、轉校して来た友だちを、風の一族だと信じこむ小学生たちの話である。

「ミシシッピ川の探検」は、おとなの空想が貴重な発見をもたらした記録である。空想のつばさをいっばいにひろげて、高く／＼、すみきった大空に舞い上がるのではないか。

「一」 てんぐ笑い

豊島與志雄

昔、ある山すそに小さな村がありました。村のうしろは、大きな森から山になっていまして、前は、広い平野に美しい小川が流れていました。村の人たちは、平野を開いて穀物や野菜を作ったり、野原

に牛や馬を飼ったりして、楽しく平和に暮らしていました。

村の人たちは皆なかよしでした。それで、子供たちも皆お友だちでした。おとなたちがたんばや牧場で働いてる間、子供たちはいっしょに集まってなかよく遊びました。

ある夏のはじめ、子供たちはいつものようにいっしょに集まって、村のうしろの森のはすれの原っぱで、土盛りをしたり輪投げをしたりして遊んでいましたが、それにもあきて来ると、近ごろはやりだしたにらめっこを始めました。それは遠くの町から傳わって来た遊びで、これまでまだ村には知られてなかったのです。新しい遊びなだけに、子供たちは非常におもしろがりました。

「にらめっこしようか。」

「しよう。」

原っぱの中にみんなは丸く輪を作つてすわりました。そしていっしょに言いました。

だるまさん、だるまさん、

にらめっこしましょう。

わらうとぬかす、

一二三……うむ。

うむ……ときばつて、息をつめて、両手をひざについて、目をみはって、おかしい顔つきをしながら、ほかの者を笑わそうとするのです。はじめにぶうつとふきだした者は、すぐ抜かされて、また「だるまさん」が始まります。そして一番おしまいで残つた者が勝ちなのです。

子供たちはそれを何度もくり返しました。

幾度めかにまたみんなで、「だるまさん、だるまさん」をやりだした時です。ふいに、頭の上で、空のまん中で、「わは、ゝゝゝ。」と大きな笑い声がありました。

「おや……。」と、息をつめたまゝで見上げますと、森の上からぬうつと大きな顔がのぞき出して、それが空いっばいの大きさになって、家のような大きな目と鼻と口とで、「わは、ゝゝゝ。」と笑っています。と、すぐに、その顔も笑い声も消えてしまつて、日の光のきら／＼してる青い空ばかりになってしまいました。

「何だろう。」

みんなびつくりして、それからふとこわくなって、村の中へ逃げ帰りました。

二

そういうことが時々起りました。うっかり「だるまさんのにらめっこ」をしていると、空いっばいの大きな顔が、頭の上で大きな声で笑うのです。びつくりして見上げると、そのとたんに顔も笑い声も消えてしまうのです。

はじめ子供たちはそれをこわがりましたが、だん／＼慣れて来ると、かえつておもしろくなって来ました。顔が出て来ないと、何だかさびしいような氣さえました。

「きょうはきつとあの顔が出て来るよ。」

「出て来るかしら。」

「出て来るとも。出て来るまでやろうや。」

そしてみんなで、村のうしろの森はすれの野原に集まって、丸く輪になつてすわりながら、「だる

まさんのにらめっこ」を始めました。が何度やっても、空いっぱいの大きな顔が出て来ませんでした。

みんなは意地っばりになってなおやり続けました。するうちに、いつのまにどこから来たのか、見慣れない子供がひとり、横の方に突っ立って、にこにこしながら、みんなの遊びを見ている。

みんなは不思議に思つて、その子供を取り巻きました。穀物や野菜や牛や馬を買いに来る商人のほかは、めつたに人がよそから来たことのない、へんびな村なんです。それなのに、ひょっこり子供がひとり出て来たのです。

「きみはだれだい。」

「どこから来たんだい。」

「何しに来たんだい。」

「ひとりで来たのかい。」

そんなふうには、みんなは、代わる代わる尋ねました。けれどもその見慣れない子供は、なんにも答えないで、たゞにこ／＼笑つてばかりでした。そしてやがて、ふいに言いました。

「ぼくも、にらめっこに入れてくれないか。」

「あゝ、いいとも。」

みんなは喜びました。そして見慣れない子供といっしょに、また「だるまさん」を始めました。

ところが、その見慣れない子供が強いなんのつて、どんなおかしな顔をして笑わないんです。二十人いたものが、ひとり抜かされふたり抜かされして、しまいには、一番強いので、「鬼がわら」

とみんなからあだなされてる子供と、見慣れない子供との、ふたりっきりになりました。

「鬼がわら、しつかりやれよ。」

「はじめて来た子に負けるな。」

村の子供たちはそう言つて、わい／＼はやしたてながら、ふたりのまわりを取り囲みました。ふたりはきちんとすわつて、ひざの上に両手を握りしめて、身構えをしました。

だるまさん、だるまさん、

にらめっこしましょう。

わらうとぬかす、

一二三……うむ。

まわりのもので、みんな息をつめました。ふたりはじつとにらめっこをして、どちらも笑いたしません。「鬼がわら」はほんとに鬼がわらのような顔つきをして見せましたが、見慣れない子供は、びくともしませんでした。そうしてうちに、ふいに見慣れない子供の鼻がびく／＼動きました。「鬼がわら」の方も笑いだしません。すると今度は、びく／＼動きました鼻が、ぬうつと長く伸びました。見ていたものはびく／＼しました。が、「鬼がわら」はまだ笑いだしません。すると今度は、長く伸び出した鼻が、「鬼がわら」の鼻先までやって来て、ゆら／＼ふら／＼とおかしくなつて、うで踊りました。

とう／＼たまらなくなつて、「鬼がわら」は、ぶうつとふきだしました。みんなはわつとはやしたてました。が不思議なことには、見慣れない子供の鼻は、勝つが早いかすつと引っこんで、もとの通

りになってしまいました。

「するいや、するいや。鼻をあんなに伸ばすなんて、するいや。」

「鬼がわら」は、そう言って詰め寄って来ました。みんなもそれに味方しました。

「鼻を伸ばしといて踊らせるのはするいや。」

見慣れない子供は、たゞにこゝろ笑っていましたが、みんなから、「するい、するい。」とあまり言われますと、それじゃも一度やりなおそうと言いました。みんなも賛成しました。

「やりなおそう、はじめから……。鼻を伸ばすのはなしだよ。」

そしてまたみんなはいっしょに、「だるまさん、だるまさん」を始めました。ところが、最初に笑いだしたのから順々にひとり抜けふたり抜けしてうちに、いつの間にか、見慣れない子供の姿が消えてしまったのです。

「おや、あの子供はどこへ行ったろう。」

「いない。消えちゃった。」

みんなはきよんとしてしまいました。いくらさがしてもどこにも見えません。

「わはゝゝゝ……。」

頭の上で笑い声がありましたので、見上げてみると、空いっばいの大きな顔が笑っています。かと思う間に、すぐに消えてしまって、青々と打ち晴れた大空ばかりになりました。

みんなはぼんやり空を見上げていましたが、次にはおかしくなって、「くくくくく」と、それから「あはははは」と、声をそろえて笑いだしました。

三

子供たちはおもしろがって、その話を村のおとなたちにもしました。おとなたちの方では、そんなことがあるものかと思つて、はじめはほんとうにしませんでしたが、子供たちが皆ほんとうだと言いますし、見慣れない子供が出て来て消えたことなどを聞くと、そのまゝうっちゃってもおかれないと思いはじめました。なせなら、それを悪い鬼のせいだと考えたのです。

「それは、悪い鬼に違いない。悪い鬼がやって来て、子供をさらって行くつもりで、はじめはまず、そんなふうには、子供をだまかしてゐるんだ。」

「そんなことはないよ。もし鬼だったら、おもしろいよい鬼だよ。」

そう子供たちは言い張りましたが、おとなたちは聞きませんでした。そして鬼たいじを始めることに相談をきめました。

子供たちは悲しくなりました。けれど、おとなたちが無理に言うものですから、しかたなしに例の所へ行つて、「だるまさん」を始めました。

おとなたちは、そうして子供たちを遊ばしといて、自分たちの方は、まだ鉄砲のないころでしたから、弓や石投げ機械や刀や棒など、てんでに何か武器を持って、森の木の陰や村の家の陰なんかに隠れて、今に鬼が出て来たら、打ち殺すか縛りあげるかしてやろうと、じっと待ち構えました。

子供たちはいやでいやでたまりませんでした。あんなおもしろい鬼を悪い鬼などと言って、おとなたちがそれを待ち伏せしているのが、氣になつてしようがありませんでした。それでもおとなたちの言いつけですから、どうすることもできないで、心ならずもにらめっこをしました。けれど、もう笑

うものなんかあまりなくて、長くにらめっこをしていると、笑う代わりに泣きたすものさもありました。するうちに、だん／＼子供たちははげけになってきました。みんな立ち上がり、輪になってぐるぐるまわりながら、大声にどなりました。

だるまさん、だるまさん、にらめっこしましょう。

わらうとぬかす、

一二三……うむ。

うむ……ときばって、立ちどまってにらめっこをします。が、だれも笑いだす者がありません。でも、また、ぐる／＼踊りまわって、「だるまさん、だるまさん。」をくり返します。その調子が次第に早くなって、もう踊りっこをしているのか、にらめっこをしているのかわからなくなって、夢中にぐるぐるまわりました。

と、突然、「わは、／＼、／＼。」と大きな声がありました。はっと思つて見上げると、空いっばいの大きな顔が笑っています。かと思ふ間に消えてしまつて、しんとまりました。と今度は「は、／＼、／＼。」と大せいの笑い声が聞えました。おとなたちが武器を手にしたま、ぼんやり空を見上げて、声をそろえて笑っているのです。

おとなたちは、はじめその空いっばいの顔の鬼をたいじするつもりでしたが、子供たちのにらめっこや踊りっこがあまりおもしろいので、それに氣を取られているうちに、いきなり空いっばいの顔が出て来て大笑いをし、すぐに消えて行つて、まっさおな大空と美しい日の光とだけになつてしまつたもの

ですから、ほかあんとして、思はず笑つてしまつたのです。

それを見ると、子供たちも「わあっ。」と笑いだしました。

そののち、空で笑うのはきつとてんぐだろうと、だれかが言いました。そしてそれをてんぐ笑いとみなは言うようになりしました。夏の晴れた日なんか、野原に出て、「だるまさん、だるまさん。」をやりながら、日の光のざら／＼とした青い空を見ると、空いっばいの大きな顔で、「わは、／＼、／＼。」とてんぐ笑いがすることがあるそうです。

(現代日本文学全集)

研究

- 一 子供たちが、空いっばいの大きな顔を、かえつておもしろく思うようになったわけを考
- 二 鬼たいじに失敗して、おとなたちは、それを残念に思つたのだろうか。

- 三 空で笑うのはてんぐだときめたのはなぜか。
- 四 てんぐのお話を、ほかに、聞いたり読んだりしたことがあるか。
- 五 実際には、ありえない点をあげて、それをどう感じるか、話しあおう。

〔二〕風の又三郎

原作 宮沢賢治

本課はシナリオである。シナリオは映画の脚本のことであるが、小説や戯曲と違って、特に場面の移り変わりに注意し、視覚と聴覚とを働かせて、一コマずつの情景を心に描き出せるようにしたい。

三 空想のつばさ

原作は宮沢賢治の童話で、本課はそれを映画化するために書きかえたものである。

人物

三郎（風の又三郎）	五年生
一郎	六年生
嘉助	四年生
佐太郎	四年生
耕助	三年生
悦治	三年生
承吉	一年生
小助	一年生
かよ（佐太郎の妹）	二年生
先生	
嘉助の姉	
その他男女生徒数名	



山あいの小さな村落 さわやかな九月一日の朝である。遠くの雄大な山々が、青空にくっきりと起伏を描いている。谷川がさらさらと鳴りながら白く光って流れている。村の屋根屋根もまぶしく輝いて見える。二十才日の風が、時おり

うなりを立てて空を走って行く。すると、かやの林が青白く波立って揺れ、すももいっせいに立ち騒ぐ。

小学校附近の道 雪ばかまをはいたふたりの一年生の子（承吉と小助）が歩いて来る。

小学校の表門 小さな分教場で、うしろはくり林のあるきれいな草の山である。教室はたった一つしかなく、運動場もテニスコートぐらいの大きさである。承吉と小助、校庭にはいって行く。

校庭 まだ生徒はひとりも来ていない。日光が運動場いっぱいにあふれている。一むねの教室と先生のすまいが、隣りあって立っている。承吉と小助、運動場を見まわし、

承吉 ほう、おら一等だぞ、一等だぞ。

小助 うゝん、おらの方が一等だ。

と、先を争うようにして教室の昇降口にかけて行く。

教室 十四、五人の机しかない。

承吉 ほら、やっぱしおらが一等だ。

小助 おらだっぺ一等だ。

大喜びでかけこんで来る承吉と小助。と、一方を見て、急にぎくぐくと棒立ちになり、思わず目をみはる。

しんとした朝の教室——その一番前列の机に、ひとりの見も知らない不思議な子供が腰掛けている。ね

すみ色のだぶりの上着を着、白い半ズボンに赤皮の半ぐつをはいた、赤い髪の毛をした子供で、じっと身動きもせずに、黒板を見つめている。承吉と小助、息をのんで顔を見合わせ、ぶる／＼ふるえだす。突如、一陣の風が吹いて、教室の窓ガラスががた／＼と揺れる。そしてまたしんと静まりかえる。赤毛の子供のうしろ姿はさらに身動きだにしない。承吉と小助の顔に恐怖の色がみなぎる。いきなり小助がおびえたように泣きだす。承吉の顔もゆがみかけて来る。と、その時――

ちようはあかぐり、ちようはあかぐり……。

元氣な四、五人の合唱が聞えて来る。承吉、ほっと救われたように入口の方を顧みる。四年生の嘉助を先頭に、佐太郎・耕助・悦治をはじめ、佐太郎の妹かよ、その他ふたりほどの女生徒が、ど／＼とはいって来る。生徒たちは、みんな雪ばかまをはき、かばんやふろしき包みをか／＼えている。

嘉助 (べそをかいているふたりを見、) あれ、小助、なして泣いでら。

佐太郎 承吉、おめえ、またいじめだな。

と、承吉の肩をつかまえる。承吉、自分も「わあ。」と泣きだす。

嘉助 おがしなやつらだな。ふたりして泣いで……。

小助 (目をこすりながら、) だっで、おらの机に……、おらの机に……。

一同 え……。

嘉助や佐太郎ら、はじめて教室の中を見まわす。化石のようにすわっている不思議な子供。

嘉助 あっ、何だべ、あいづ……。

一同もぎょっとする。互に薄氣味悪そうに顔を見合わせる。だれもことばがなく、しんとしてしまう。続い

て二、三人、小さな男女の生徒が寄って来るが、みんな棒立ちになって口をつぐんでいる。

一郎 おうい、何した、何した。

六年生の一郎の声がある。

耕助 あっ、一郎だ、一郎が来た。

一同、ほっとしたように姿勢をくずし、一郎を迎える。

一郎 (おとなのように大またに現われ、) 何したんだ。

と分別くさそうに尋ねる。

嘉助 一郎、あれを見ろ。

と、赤毛の子供を指さす。一郎、見るが、自分も思わすげ／＼そうに目をしばた／＼。

佐太郎 あ、やって、さつきから小助の机にすわっているんだ。

耕助 一郎、何だべ、あいづは。

悦治 一言もものをしゃべらねえんだ。

一郎 (思案げに、) ふうん、だれも知らねえのかい。

一同 知らねえさ。

あんなやづ、見たごどもねえ。

一同、が／＼とひしめく。

一郎 (なおもじっと見るが) よし、みんな、おらといっしょに來い。

と、かばんをしっかりとか／＼え、さっさと運動場へ出て行く。一同もすっかり元氣になってついて行く。赤

毛の子供、ひとりじつと動かずにいる。

校庭および教室 一郎たち、ぞろ／＼と窓の下に行く。

一郎 (いきなり窓ガラスをあげ、) だれた、時間になんねえのに、教室さはいっているのは。と、首を突き出してどなる。

耕助 (まねて、) お天氣のいい時、教室さはいっているすと、先生にうんとしからえるぞ。

嘉助 しからえても、おらは知らないぞ。

悦治 おらも知らないぞ。

一郎 早く出はってこ、早く出はってこ。

一同 (それにならない、) 早く出はってこ、早く出はってこ。

赤毛の子供は耳がないかのように、きちんとひざに手を置いたまゝ、だまって黒板を見つめている。

裏山の林

かややくりの葉が、青白く光って波のように揺れ騒ぐ――。嘉助、はっと何か胸にひらめくものがあるらしく、急いで教室内の子供に視線を注ぐ。赤毛の子供の横顔に、瞬間にやっと笑いが浮かんで、少し動いたようである。

嘉助 (突然に叫ぶ、) あゝ、わかった。あいつは風の又三郎だ。

一同、びっくりして、嘉助の顔を見る。

耕助 風の又三郎。

嘉助 (ひとみを生き／＼と輝かせながら、) そうさ、風の又三郎だ。きつと二百十日の風に乗って來

たんだ。

口々に うん、そうだ。そうに違いないえ。

小さな子供たちは、強くうなずく。呼笛の音が聞えて來る。先生が太陽をまぶしそうに受けながら、呼笛を吹き鳴らしている。

教室 生徒たちの元氣な足音が聞える。赤毛の子供はなおも動かない。入口から、まず一年生がはいって

來るが、何かためらうように足踏みする。

先生 (先頭に出て來る、) どうした、どうした。

一同の視線を追って、赤毛の子供を発見するが、べつだん驚いたふうもなく、

先生 あゝ、高田さん、もう來てたんですか。

と、進み寄って行く。一同、好奇のひとみで注目している。赤毛の子供は、急に立ち上がり、だまって先生におじぎをする。先生、にこやかにうなずき、

先生 高田さん、あなたの席は今すぐきめてあげますから、ちょっとこつちで待っていてください。と、教壇のそばへ連れて行く、生徒ら、なおもぼかんとして見ている。

先生 さ、みんな早く席について。

一同、われに返ってそれ／＼の席につく。

一郎 礼。

一同、礼をする。赤毛の子供も教壇のそばで、べこんと頭をさげる。

先生 (礼を返し、) え、と高田さん、あなたは確か、五年生でしたね。赤毛の子供、だまってるな。

先生 (教壇を降りて行き、) では、こゝをあなたの席にしましょう。と、嘉助や佐太郎の席に近い一つの机に、赤毛の子供をすわらせる。一同、あい変わらずじろくながめて

先生 (教壇にもどり、) あ、みんな、長い夏のお休みはおもしろかったらうね。みんなは朝から水泳ぎもできたし、にいさんやねえさんの草刈りについて上の原へ行ったりしただろう。けれど、きのうで休みは終わった。これからは、第二学期で秋だ。昔から秋が一番からだも心も引きしまって、勉強のできる時だと言つてある。みんなもきょうからまたいっしょに、しっかりと勉強しようね。——それから、このお休みの間に、みんなのお友だちがひとりふえました。それは、そこにいる高田君です。高田君は今まで、北海道の学校におられたのですが、今度おとうさんが会社の御用で、上の原の入口に住むことになったので、いっしょに移つて來られたのです。きょうからみんなのお友だちになるのだから、みんなもそのつもりで、学校にいる時はもちろん、くり拾いや魚とりに行く時も、高田君を誘つてあげなければいけない。わかつたね。わかつた人は手を上げて。

生徒一同、すなおな氣持で、いっせいに手を上げる。と、例の子供も勢いよく手を上げる。
先生 (ちょっと苦笑し、) いや、わかつたらよろしい。

一同、手をあろすが、

嘉助 (急に、) 先生。

と、また手を上げる。

先生 なんだね、嘉助。

嘉助 あの、高田君、名はなんていうべな。

先生 高田三郎君です。

嘉助 (大喜びで手をたゝき、) わあ、うまい、そりゃ、やっぱり又三郎だな。

と、踊り上がらんばかりにする。一同、どっと笑う。先生、なんのことかわからずめんくらった表情をする。一郎、三郎の様子をうかどうようにながめる。三郎、両手を握りこぶしにして、机の上に乗せている。にわかにもまた、風が吹きつけて、ガラス窓が揺れる。一郎、はっとして窓をながめやる。

道 伸びほうだい伸びた夏草が風に揺れている。そうじを終えた一郎・嘉助・佐太郎の三人が連れ立って帰つて來る。

嘉助 —— な、一郎、ほんとにあしたから又三郎学校さ來て、本を読んだり字を書いたりするべか。

一郎 そりゃ、学校さはいった以上、やっぱり本も読むべさ。だけど、あいづ通信簿も宿題帳も持つてなかつたぞ。

嘉助 きつと、通信簿なんて、そつたらものいらねえんだべ。

佐太郎 ばかだな。学校が違つたから、新規の通信簿を作つてもらはんじゃねえか。

嘉助 違わい。風の又三郎だもん、はじめっから通信簿なんか持ってねえだ。

佐太郎 何して、あいづが風の又三郎だ。

嘉助 又三郎だから、又三郎だ。

佐太郎 そうしたら、むちゃな理屈あるけ。

嘉助 だって、あいづが何かするど、きつと風が吹くであねえか。

佐太郎 二十十日だもの風あ吹くさ。

嘉助 そだない。二十十日だから、又三郎風に乗って飛んで来たんだ。先生も言ったただべや、風の大家族が道草をくらって行くど。——先生も又三郎だったこと、ちゃんと知ってるんだ。

佐太郎 どうだか、わかるもんか……。

一郎、ふたりの問答に耳を傾けながら、自分でも何か思い惑う感じである。

姉 嘉助。

と、呼ぶ声。嘉助の姉がのら姿で、畑の中から呼んでいる。その向こうに見えるのが嘉助の家らしい。

嘉助 (足をとめ、) ねえちゃ、何か用か。

姉 おまえのうさぎ、八匹子を生んだじゃあ。

嘉助 ほんとか。

姉 うそこぐもんか、早く行ってみろ。

嘉助 うわあ、おらのうさぎ子を生んだとよ。

嘉助、夢中になって、かけだして行く。一郎と佐太郎、更に道を歩いて行く。しばし黙々と歩を運ぶが、

佐太郎 ——な、一郎。

一郎 ……。

佐太郎 おめえ、ほんとに、あいづ風の又三郎だと思うか。

一郎 (ちよっとことばによどむが、やがて、きっぱりと、) おら、そうは思わねえ。

佐太郎 (わが意を得た顔で、) そうだべな、嘉助のばかやろう、又三郎だってきかねえだ……。

一郎 でも、あいづのこと、又三郎って呼んだ方がおもしろえな。おかしなやつだし、たゞの三郎よりよっぽどえぐねえか。

佐太郎 うん、そしたら、又三郎って呼んだってよかつべ。

別れ道に来る。

一郎 じゃ、さよなら。

佐太郎 さよなら。

一郎ひとりになって歩いて行く。突然、風が巻き起って、あたりの草を白い波のようにうねらして行く。一郎、どきどきとして立ちどまり、何かのけはいを感じるように、あたりを見まわす。土手の上に三郎が突っ立っている。一郎、いきが詰まるような思いで足をすくませる。三郎、一郎を見、にやりと何か人なつこそうにほおえむ。一郎、しいて胸をしすめ、自分も口もとに微笑をつくる。

三郎 きみ、六年生だね。

一郎 あゝ。

三郎 級長かい。

一郎 うゝん、級長じゃねえが、六年生は、おらひとりだからな。
二郎 ふうん……。豆腐、どこで賣ってるか知ってるかい。
一郎 え……。

とうとつな質問にめんくらう。

三郎 お豆腐だよ。おとうさんが買って来いって言うのさ。
と、手にしていたなべを示す。

二郎 あゝ、豆腐買いに行くのか。そんなら、この土手をまっすぐに行くと、火の見やぐらがある
からな、その下の酒屋へ行きゃ賣ってるよ。

三郎 酒屋で豆腐を賣るのかい。

一郎 あゝ。

三郎 ふうん……。

三郎 (いぶかしそうな面持をするが、) ありがと……。
すた〜と、土手の上を歩いて行く。一郎、じっと見送っている。

谷川の橋——翌朝 けさもよく晴れて、谷川がさら〜と鳴っている。一郎・嘉助・佐太郎・耕助・悦治
の五人と三郎が、それ〜柳の枝でこしらえたむちを手にして橋を渡って行く。

林の中の小道 一同歩いて行く。耕助、何か不満げにぐす〜しながら、みんなから遅れて歩いている。

一郎 (振り返って見、) おうい、耕助、早く来う、何をぐす〜しているんだ。

耕助、なおもすねたようにぶら〜している。

一郎 おうい、早く来うったら。

耕助 (ゆ〜くりと追いつき、) だって、おら、嘉助とふたりでぶどう取りに来ようと思ったに、嘉助
ったら、みんなにしゃべるんだもん。

嘉助 しゃべったっていいでねえか。

佐太郎 ちえつ、けち〜するねえ。

耕助 だって、おら……。

一郎 そんなでは、おらたち来てはいけねえっていうのか、そんなら帰るぞ。

耕助 そうでねえけど、あんまりお、せいだもん……。それに又三郎までいっしょについて来るん
だもん。

一郎 又三郎はおらたちが誘ったんだ。先生が言ったじゃねえか、又三郎ともなかよくしてやらな
くちやいけねえって……。

耕助、だまってふくれている。

佐太郎 さ、早く行くべ。なんでもきょうは雨が降るかもしれねえとよ。

みんな空を見上げる。

空 少しばかり雲が走っている。薄い霧のようなものが一面に漂い、太陽がや〜ぼやけて白い鏡のように

見える。

山のくり林 一同雑草をかき分けてはいつて来る。

嘉助 おい、耕助、こゝか。

耕助 (にえきらない表情で) うん、こゝだよ。

一郎 あつ、あすこにいつぱいなつてらあ。

耕助 どれ。あゝ、ある〜。

草やぶに野ぶどうがいつぱい実っている。

一郎 さ、早くみんな取れ。

耕助 でも、こゝ、おらがめつけたんだから、あまり取るやないぞ。

一同、かまわず草やぶに飛びこんで行く。三郎、なんとなくためらっている。

耕助 (意地悪く) 又三郎、おめえは取っちゃあだめだぞ。

三郎 (むっとしたように) ぼくはくりを取るんだい。

と、石を拾って、そばのくりの枝に投げる。青いくりのいが落ちて来る。

耕助 へゝ、くりなんぞまだ早くてだめだべ。

三郎 だめでも、いいさ。

と、三郎、棒きれでいがをむく。

耕助 ほれみろ、まだそんなに白いでねえか。

三郎 白くたつていいさ。ぼくあ白いくりを取つて行くんだ。

耕助 へゝ、じゃ、おら甘いぶどうを取るべ。

耕助、みんなのいる草やぶにかけこんで行く。一郎たち夢中でちぎっている。耕助もあわててそのへんのやぶをかきまわす。と、急に風が吹いて来て、やぶがざわ〜と揺れ騒ぐ。耕助、びっくりしてきよきよるする。同時にどこからか妙な歌声が聞えて来る。

どうどど どうどど どうどど どうどど

あゝまいりんごも吹き飛ばせ

すっぱいりんごも吹き飛ばせ

どうどど どうどど どうどど どうどど

確かに三郎の声である。耕助、おやと思つてくり林の方を見る。そばの草やぶから、一郎・嘉助・佐太郎・悦治も伸び上がる。

一郎 なんだ、あの歌は。

嘉助 だれが歌ってるんだ。

耕助 又三郎だよ。

悦治 なんだか、寝ぼけたような歌だなあ。

一郎 だれか知ってるか。

口々に おら知らねえ。

おらも聞いたことねえ。

三 空想のつばさ

嘉助 おらだって……。又三郎の姿、見えねえでねえか。

耕助 そんなこだあねえさ。あいづひとりできくりを取っているんだ。

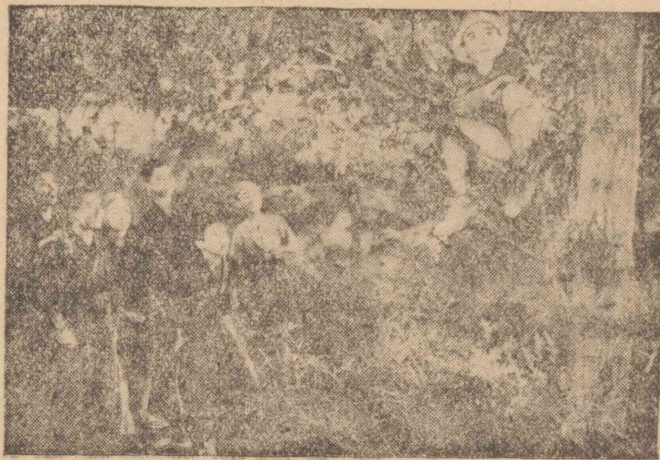
嘉助 だって、どこにも見えねえぞ。

みんなくり林をながめる。三郎の姿はどこにも見当たらない。たゞ歌声だけが確かに林の中からもれて来る。一同、顔を見合わせる。

耕助 あいづどこかに隠れているんだ……。よし。

と、意氣こんでとび出して行く。一郎も草やぶを出て行く。

耕助、三郎の歌声を頼りに林の中を歩きまわる。と、頭上のくりの枝が、さあど揺れて、しずくが雨のように降りかゝる。耕助、おどろいて頭上を見上げる。三郎が枝に登って、笑いながら自分も顔のしずくをふいている。



子供たちの所へ寄り集まって来る。耕助、手を出して馬になめさせる。他の連中も鼻づらをなでたり、手の

ひらをなめさせたりする。三郎だけ身を撃くして、ポケットに手を入れてもじ／＼している。

佐太郎 (その様子に気がつき) あれ、又三郎、馬おつかながってるぞ。

三郎 (あわてて) こわくなんかないやい。

といきなりポケットから手を出して馬の鼻先にやる。馬が舌を出してぺろりとなめる。三郎、思わず身ぶるいして、急いでまたポケットに手をしまう。

佐太郎 (おもしろそうに) わあい、又三郎、やっぱりおつかねえんじやねえか。

一郎たちも笑う。

佐太郎 (うす笑いを浮かべて) へ、弱え風の神様だな。

三郎 (くやしそうな顔になるが) よし、そんならみんなで競馬やるか。

口々に 競馬。

どんなことをやるんだ。

三郎 (得意そうに) なあんだ、競馬を知らないのか。ぼく、北海道でなんべんも見たぞ。ますみんなの持ち馬をきめてね、それを追いかけて走らせるんだ。そして一番早く決勝点、ほら向こうのあの大きな木の所へ着いた者を一等にするんだ。

嘉助 うん、そいつあおもしろいな。

一同 おもしろえ、早くやるべ。

佐太郎や耕助も勇み立つ。

一郎 でもしからえるぞ、牧夫に見つかったらどうするんだ。

三 空想のつばさ

佐太郎 だいじょうぶだよ。どうせ競馬に出す馬じゃねえか。

一郎 うん、それだけど……。

口々に さ。やるべ、やるべ。おら、この馬だぞ。

よし、おら、この馬だ。

おら、この馬だ。

一郎 (つりこまれて) じゃ、おら、あの馬だ。

それ、六人の持ち馬がきまる。

三郎 じゃ、みんな、一、二、三、で、むちで馬をひっぱたくんだ。いいかい、一、二、三。

みんな、柳のむちで軽く馬のしりを打つ。けれど、馬はゆう／＼として一匹も走りださない。

一郎 よし、おらが走らせてみせる。

と、両手をびしゃんと、打ち合わせ、「だあ。」と叫ぶ。とたんに全部の馬が飛び上がるようにして、たてがみをそろえてかけだす。子供たち、いっせいに歓声をあげ、

一同 だあ、だあ。

と、叫びながら、夢中で追いかける。と、馬が決勝点とは違う土手の入口の方に向かってかけはじめ。

一郎 (さっと顔色を変え) あっ、馬、出はる、馬、土手から出はるぞ。

と必死になって追いかける。他の連中も急にあわてて追いつがろうとする。

牧場の入口

早くも一頭の馬が丸太を飛び越えて、草むらの中に走りこんで行く。続いて他の一頭が一目

散に飛び出す。

一郎 (ころぶようにかけつけ) 早く来て押さえろ、早く来て押さえろ。

と、叫びながら急いで丸太棒を元通りにする。三郎と嘉助が息を切らして飛んで来る。

一郎 (しっぺするうちに) 嘉助、出はった馬を早く押さえろ、早く押さえろ。

三郎と嘉助、敏捷に丸太棒の間をくぐり抜け、馬の後を追いかけて行く。

野路 二頭の馬狂ったように奔走して行く。一丈ぐらいの高さに伸びた雑草やすゝきを飛び越え、飛び越

え……。

三郎、無我夢中で追いかけて行く。二、三間遅れて、嘉助も懸命に走っている。

かけ抜ける馬。追う三郎。草の中に白い帽子がちらほらと見を隠れする。走る嘉助。草の波。嘉助、汗みずくになってかける。——かける……。

すでに馬も三郎の姿もない。嘉助、たどむちゃくちゃにかける。——ついに道がとぎれてしまう。

嘉助、くたびれたように立ちどまる。あたり一面草の波。西も東もわからない。いつの間にか霧が流れている。びかりといなすまが光る。遠く雷の音。嘉助、空を見上げる。

空 黒い雲が空いっぱい速く／＼走っている。びか／＼と電光がはためく。

深い草の中 あたりが夕方のように暗くなって来る。冷たい風が吹いて来て、一面の草が地になびく。霧がますます／＼しげく／＼来る。嘉助、急に恐ろしくなって、きびすを返し、草をかき分けて進む。いなすま。

遠い雷鳴。——霧。いくら進んでも草、草、草……。

嘉助 (心細くなって) おうい。

と、呼んでみる。どこからも答がない。

嘉助 一郎、一郎、こっちさ來う。

のどいっばいに叫ぶ。霧が更に深く漂う。風がさっ／＼と吹き渡って行く。ばら／＼と草がはら／＼と玉になっている。嘉助、ふる／＼と寒けをおぼえて、自分の肩を抱きすくめる。着物がじっとりしめっている。ぼたりぼたり草からしすくがたれる。

嘉助 おうい一郎、一郎……。

嘉助、泣き声になって、なおも草の中をさまよって行く。と、草の中の小さな廣場に出る。くりの木が一本突っ立って、馬のひすめのあとがたくさんついている。嘉助、くりの木の根もとにくすれるように腰をおろす。目の前を濃く流れて行く霧……。強い風が吹くたびごとにすゝきの穂が西を向いたり、東を向いたり、せわしく揺れる。ぴかりとあたりが青白く光ってまぢかに雷の音。

嘉助 あゝ……。

両手で顔をおもう。そのまゝ、氣を失ったように倒れる。深い眠りに落ちて行く嘉助の顔……。霧、霧……。と、ごう／＼とものすごい風が吹き渡って、嘉助の顔をなでて行く。嘉助、はっとして目をあける。一方を見てむっくり身を起す。

——すぐ目の前に三郎がすわって、草に足を投げ出し、だまって空を見上げているのだ……。例のねずみ色の上着の上にぎら／＼光るガラスのマントを着、足には、ガラスのくつをはいている。その周囲を風やら霧

やらがどん／＼流れている……。

嘉助 又三郎……。

嘉助、目を疑うように乗り出す。と、三郎が静かに歌いだす。

どうどど どうどど どうどど どうどど

あゝまいざくろも吹き飛ばせ

すつばいざくろも吹き飛ばせ

どうどど どうどど どうどど どうどど

はためく電光。うなりを立てる疾風。しかし、三郎は自若として歌い続ける。

嘉助 あゝ、又三郎……。

嘉助、思わす声を立てようとする。と、いきなり三郎は、ひらりと空へ飛び上がる。ガラスのマントがぎら／＼と光ったかと思うと、もう姿はない。

たゞ、霧がいっばい流れている。

(雑誌「日本映画」)



研究

一 教室にはいる時、列の先頭の一年生が、入

三 空想のつばさ

口で、ためらうように足踏みしたのは、なぜ

- 一 野ぶどう取りの時、耕助がすねこのはなぜだと思ふか。
- 二 三郎と子供たちと、どういう点が違っているか。あけてみよ。

- 四 子供たちは、三郎を、なぜ、「風の又三郎」と呼んだか。
- 五 自分の考えや感情を表わすのに、シナリオでは、口で言い、また、動作で示している。小説では、ほかにどんな表わし方があるか。

〔三〕 ミシシッピ川の探検

波多野完治

合衆國を北から南へ流れるミシシッピは、世界で一番長い川で、ミシシッピとは、アメリカカーイン・デアンのことばで「大きな水」という意味である。本流だけで、四千七百キロ、わが信濃川の十倍ほどに当たる。四十本の支流の長さを加えると、二万七千キロ以上になるといふ。

ミシシッピが、長い一本の川だということは、長い間わからなかった。十六世紀のはじめに、河口が発見され、十七世紀の終りに、源が発見され、一つの川を知るのに、一世紀半もかかったのである。

では、この川はだれの手で、どんなふうにして、最初の探検がなされたのであろうか。

一五四〇年の春、アメリカ合衆國南部のフロリダ半島に、九隻のスペイン船が到着した。それには、六百の乗組員があり、直ちに上陸の準備にかゝって、忙しく立ち働いた。鉄砲・大砲・よろいかぶと、鉄を造るためのふいごなどをはじめ、馬から豚までが陸あげされた。馬の方はいいとして、豚はどういう意味だ、ときみたちは不思議に思うことであろう。これはつまり「かんづめ」の代わりなのである。昔はかんづめという方法で、肉を腐らぬようにとっておくことを知らなかった。肉はほうってお

けば、どん／＼腐ってしまう。ことにフロリダのような暑い地方では、生肉など一日たってもちはしない。だから腐らぬ肉を食べる一番いい方法は、生きた豚を連れて來ることであつた。豚がぶ／＼言いながら、海岸をよち／＼はいまわる姿は、ほおえましいものがあつた。

ボートが海岸に着いた時、ひとりの指導者が降り立つた。口数の少ない、きびしい顔つきの人であつた。かれの顔は自信に満ちており、その命令は、必ず実行されずにはおかない重みを持っていた。かれの名はデーンソートであつた。フォード・シボレーなどと並んで、自動車にデーンソートという種類がある。これはかれにちなんで名づけられたものである。

かれはスペインの貧乏な貴族の生まれであつた。若い時先輩にまじつて南米征服に加わり、そのおかげで大きな財産をつくつた。この金を持って、かれは一時故郷スペインへ帰り、安樂に暮らしていた。しかしこの時代は冒険の時代であつた。コロンブスはアメリカを発見し、ヴァスコ・ダ・ガマはインドまでの航路を開き、マジエランは世界一周を完成した。元氣のいい人がじつとして他人の手がらを見ていられるものではなかつた。

デーンソートがスペインへ帰つてからも、いろ／＼な人がメキシコへ行き、ペルーへ行き、カナダへ行つた。それらの人のうちには失敗した者もある。しかし、他人の失敗を見れば見るだけ、自分の勇氣を奮い立たせるのは、冒険家の常である。デーンソートもスペインでのんきな生活をしているうちにはやり立つ雄心を押さえることができなくなつた。

そこへ一つの報告がはいつた。それは、メキシコの北の方にいるインデアンが、北方の奥地には金銀がたくさんあり、その王の宮殿は金でお、われている、と話したというのである。南米ペルーには

すばらしい宝があった。デリソートはそこでたくさんの財産をつくった。フロリダと名づけられたこのメキシコ北方の土地にも、土人のいう通りの宝があるのではないか。フロリダから西の奥地へはいつて行けば、インデアンと戦って、たくさんの金銀を國に持って帰ることができはしまいか。

デリソートの血は沸き立った。そうして費用は全部自分が出すから、その土地を探検し、支配することを許してもらいたいと、スペイン王に申し出た。スペイン王もメキシコ遠征に成功したデリソートの言うことゆえ、喜んでかれの申し出を聞いた。そうしてかれをキューバ島の総督に任命し、そこでいろいろな準備を整えることを許した。この報知を聞いたスペイン國中は歓呼した。デリソートの家には何千という貴族・平民・農夫たちが押しかけて来て、同行を望んだ。デリソートは、その中から六百二十人を選ぶのに、大きな苦心をしなければならなかった。

だが、なせデリソートたちは、そんなに金や銀をほしがったのであろうか。われ／＼でも金や銀があればいいと思う。しかし、金や銀ばかりではしかたがない。それよりも、鉄や木材や米や麦の方が尊い。鉄や銅があれば、機械はなんでもできる。木材があれば、工場が建てられる。米麦があれば、それを食べながらどんな物でも作って行くことができる。金や銀もこれらを買うことができるから尊いのである。しかし、今から四百年前のヨーロッパ人にはこのことがわからなかった。かれらは、富は金や銀だと思っていた。ほんとうの富は金や銀にあるのではなく、鉄・木材・石油等にあるのであるが、スペインの人たちは、それらの富の映った影である金銀を、むしろにほしがった。

しかし、このまちがった考えが、コロンブスにアメリカを発見させ、その他多くの人々に、いろいろな探検や発見をさせるようになったのであるから、ばかにはできない。コロンブスは日本や中國に

金銀があることを聞き、西まわりの航路を考えて、ついにアメリカを発見したのであった。

デリソートの探検図



三 空想のつばさ

ともかく、デリソートはそのような目的で九隻の船隊を組織し、一五四〇年五月、フロリダへ上陸したのである。

さて、宝はどちらの方にあるのか。かれらは、まず土人の言ったことにしたがって、フロリダ半島を北方へのぼって行った。この旅行はらくではなかった。アメリカ土着のインデアンたちが常に敵意を示したからである。かれらは、晝間は白人の通り抜けできない小道に隠れ、夜になると出て来ては一行を苦しめた。もちろん、一行も土人を捕らえてはこれを奴隷とした。しかし、奴隷たちはいいかげんな道を教え、その方へ行けば金銀があるようなことをほめかした。

途中でデリソートの一行はひとりの白人に出会った。これは前の探検隊の人で、はぐれて、インデアンにつかまっていた。この白人のおかげで一行は土人のことばを理解することができるようになった。だが、この白人も金銀のありかを知らなかった。りっぱな御殿があるどころでなく、あるものはインディアンのテントと、木と獣と野蛮人だけだ、とかれは言った。一行はたいへん失望して、こう言った。

「総督、もう先に行ってもむだです。この土地には金銀はないのです、引き返そうではありませんか。」

「いゝや。」デリソートは言った。「自分は帰らない。自分はこの土地が確かに貧乏だということはこの目で見るまでは帰らない。」

とうとう冬になった。一行は冬じゅうあてもなくさまよい歩いた。新しい土地へ着くと、土人を捕らえて食物やみつぎものを要求した。そうして、このことがまた、一行に対する土人たちの敵意をおこした。しまいには土人たちにまねて、犬まで食べなければならなくなった。一番困ったのは塩の欠乏であった。持って来た塩は、とうの昔なくなってしまうた。土人たちも持っていない。そこで一行は犬の肉を塩をつけずに食べなければならなかった。

やっと春になって、西の方に女王の治める國があること、そこには黄色い金属がたくさんあるという話を聞いた。黄色いかね。これは金に違いない。一行は勇み立ってそこへ進んだ。だが、実際に行ってみて驚いたことには、黄色いかねというのはしんちゆうのことであった。結局女王から小さな真珠を、少しばかり手に入れることができたに過ぎなかった。

だが、このような数々の失敗は、デリソートの心をますます強くするばかりであった。冬の間には病気で死んだり、インディアンの襲撃を受けて殺されたりして、一行は三分の二ほどに減っていたが、デリソートはますます勇んで、西へへと進んで行った。

一行がミシシッピ川を見たのはこの時である。デリソートは、土人からミシシッピと呼ばれる大きな川のあることを聞き、その川を調べたいと思った。川岸の地方は森が深く、行くのに困難をきわめ

た。だが、デリソートの忍耐はそれを克服した。

デリソートはこの大きな川の岸に立った。対岸には右往左往しているインディアンの姿がかすかに見える。川はたくさんの水をたゝえて洋々と流れ、大木や木の枝などがひっきりなしにくだつて来る。水はどろで赤く濁っている。ほとんど洪水のようなこの川。これは美しい景色ではない。だが驚くべきながめであった。野蛮な土地。堤防のようなもの一つあるわけではない。廣い平野を幅二キロほどの川が流れる。自然の大きさを、これ以上はつきりと示したものはないだろう。

さて、デリソートはミシシッピ川の川岸に到達した。こゝで引き返しては、かれがみなに対して、「この國の貧乏なことを、確かに自分の目で見るまでは帰らない。」と言ったことはにそむくことになる。

この國はミシシッピ川の西、どれくらい続いているか、全然見当がつかない。だが、川の水は多い。洪水のように激しい勢いで流れている。川上からは大きな木がくだつて来る。どうして川を渡るか。川の兩岸にはインディアンたちがいた。しかし、かれらはスペイン人たちのやり方を知っているので手助けをしない。手助けをしないばかりか、一行が岸から離れたら、弓で射てやろうと待ち構えているようにさえ見える。

だが、デリソートはひるまなかつた。一行は、持って来たあり合わせの道具を使って、四隻のボートを造った。これには馬を載せることができなくてはならない。馬はこんなに廣い川を泳いで渡ることとはできないからである。このじょうぶなボートを造るのに、一月かゝつた。ついに五月のある朝、暗いうちにボートを川に浮かべて、渡川作業が始まった。一度に四頭ずつの馬を渡し、五時間かゝつてやっと全員の渡川を完了することができた。こうして、ヨーロッパ人は、はじめてミシシッピの西に

足をつけたのである。

だが、西岸へ渡ってからの旅行は更に困難であった。西岸は沼地が多く、大部分はひざまで水がつき、時には、腰まで水につかって行かねばならなかった。木はおいしげり、あしの葉は手足を傷つけること、はなはだしかった。だが、金銀はやっぱり発見されない。

こうして一五四二年の冬も暮れ、デッソートはミシシッピ川から三百二十キロ西まで探検した。はじめ六百人以上いた一行は、今三百五十人になってしまった。馬は半数以上死んだ。こゝはミシシッピ川とアーカンサス川との合流点に近く、さいわい住民は、デッソートたちに親切で、食べ物、特に牛肉と塩をくれたが、衣服は破れ、雪は深く、探検をこれ以上続けることは不可能であった。

デッソートも、自分自身で國の貧乏なことを見た以上、もはや帰國するほかないと決心した。だが、どっちの方向へ行ったら海へ出られるのか。これらのことを考えているうちに、とうとうデッソートは病氣になってしまった。自分は探検に深入りし過ぎた。三年間の探検には、もつと多くの準備と用意が必要だった。また自分は、インデアンに対してたくさんの罪を犯した。このような考えがたえずかれを苦しめた。

死の近いことを知り、デッソートはおもだった部下を集めた。そうして自分の失敗をわび、新しい指導者を推薦した。そうして、この勇敢な男は死んだ。スペインではたくさんの財産を持ち、暖かい家庭にいて、スペインじゅうの尊敬を集めていたデッソートは、着るものもなく、インデアンと、荒地と、迫り来る飢えとにおびえながら立ちつくす三百名の部下を残して、異境の土にその生涯を閉じたのであった。

かれの目的は金をさがし出すことであつた。その目的は達せられなかったが、アメリカ内部を三箇年にわたって調べ、地形を明らかにし、のちに來る人々のために残した功績は量り知ることができない。このように、ほとんど世界史上でも類のない、困難な探検旅行を遂行することのできた人は、おそらくかれをおいてほかに求められないであろう。

新しい指導者は直ちに帰國を決意した。かれはデッソートの死がいをはじめ土中に埋めたが、インデアンたちが発見することを恐れた。インデアンたちはデッソートを太陽の子だと思っていて、そのためにいろ／＼の便宜を計ってくれていたからである。そこでかれは、いったん埋葬したデッソートの死がいを掘りおこし、幾重にも包み、真夜中に舟をこぎ出してこれをミシシッピ川の支流に当たる川を中心に沈めた。デッソートは、自分の発見した川の床に、安らかな眠りについたのであつた。指導者はこうして持ち物を賣り拂い、長い／＼旅を続けた末、ミシシッピ川をくだって、ついにフロリダ半島に帰って來た。全員六百二十名ちゆう生き帰った者三百十名であつた。

(ミシシッピ川のたんけん)

研究

- 一 探検隊が、豚を持参したわけを言え。
- 二 四百年前のスペイン人が、金銀をむしうにほしがったのは、なぜか。その考えは、ま

- 三 探検隊は、どういふ困難に出会ったか。
- 四 デッソートが、苦しい探検を断念しなかったのはどういふ精神からか。
- 五 デッソートは、なぜ失敗したか。探検に成

功するに必要なものは、何と何か。

四 すぐれた人々

フンントン・ペートーヴエン・キューリー夫人・紫式部、そのほかにわれわれが偉いと思う人は多い。一体偉い人、すぐれた人とはどんな人を用いのであろうか。人々のためになる仕事をした人、政治であらうと、学問であらうと、または、藝術やスポーツの分野であらうと、われわれ人間の幸福や進歩のために大きな功績を残した人々は、みなすぐれた人といふことができる。ではすぐれた人となるには、何がたいせつなのであろうか。天賦の才能か、努力か、誠実か、それとも人間に對する深い愛情であらうか。こゝには日本科学の創始のために盡くした洋学者の苦心と、医学に世界的な貢献をした野口英世の少年時代と、奴隷解放の母と親しまれている婦人作家ストウ夫人の家庭生活をあげてみた。われわれはこれを読んで、すぐれた人を生み出すものが何であるかを知り、それを自分自身の生活に生かして行くように努めようではないか。

〔二〕 創始者の苦心

杉田玄白

明和八年（一七七二）三月、わが國最初の洋学者のひとりである杉田玄白は、先輩前野良沢らとともに、新しく手に入れたオランダ医書「タブレアナトミケ」の人体解剖図を実物と比べてみるため

に、江戸千住小塚原に刑屍の腑分けを見に行った。そして、それが全く実物と一致しているのに驚嘆して、この書の翻譯を思ひ立った。本課は、その翌日から翻譯完成までの苦心を、「蘭学事始」から採ったものである。

小塚原に腑分けを見たりし翌日、良沢が宅に集まり、前日のことを語りあひ、まづ「タブレアナトミケ」の書に打ち向かひしに、まことに體腔なき船の大海に乗りいだせしがごとく、茫洋として寄るべきなく、たゞあきれにあきれてゐたるまでなり。されども、良沢はかねてよりこのことを心にかけ、長崎までも行き、蘭語並びに章句・語脈の間のことも少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、やうやくに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。

さて、この書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じあひしに、「とても、はじめより内象のことは知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の図あり。これは表部外象のことなり。その名処は皆知れたることなれば、その図と説の符号を合はせ考ふことは、取りつきやすかるべし。図のはじめとはいひ、かたゞまづこれより筆を取りはじむべし。」と定めたり。すなはち、解体新書形体名目編これなり。そのころは、助語の類もいづれが何やら心に落ち着きてわきまへぬことゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後いつかうにわからぬことばかりなり。たとへば、「まゆといふものは目の上に生じたる毛なり。」といふやうなる一句、髻鬚として、長き日の春の一日には明らめられず、日暮るるまで考へつめ、互ににらみあひて、わづか一、二寸の文章、一行も解しえざるほどにてありしな

また、ある日、鼻のところにて、「フルヘツヘンドせしものなり。」とあるに至りしに、この語わからず。これはいかなることにてあるべきと考へあひしに、いかにもせんやうなし。そのころ、辞書といふものなし。やうやく長崎より良沢求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに「フルヘツヘンド」の訳注に「木の枝を断ちたる跡、その跡フルヘツヘンドをなし、また、庭をさうぢすれば、その塵土集まりフルヘツヘンドす。」といふやうに読みいだせり。これはいかなる意味なるべきかと、また、例のごとくこじつけ考へあふにわかまへかねたり。時に翁「思ふに、木の枝を切りたる跡、塵土集まりれば、うづたかくなり、また、さうぢして塵土集まればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中において堆起せるものなれば、『フルヘツヘンド』は『うづたかし』といふことなるべし。しかれば、この語は『うづたかし』と訳してはいかん。」と言ひければ、おの／＼これを聞いて「はなはだもつともなり。『うづたかし』と訳せば適當すべし。」と決定せり。その時のうれしさは、何にたとへん方もなく、連城の壁をも得しこゝちせり。

かくのごときことにて、推して訳語を定めたり、その数も次第次第に増し行くこととなり、良沢のすでに覚えおし訳語書留をも増補しけるなり。その中にも、「シンネン」などいへること出でしに至りては、いつかうに思慮の及びがたきことも多かりき。これらはまた、行く／＼は解くべき時も出で來ぬべし。まづ符号を付けおくべしとして、丸の中に十文字を引きしてしるしおきたり。そのころ知らざることば「響十文字」と名づけたり。毎会いろ／＼に申し合はせ、考へ察じても、解すべからざるべしとあれば、その苦しみの余り、それもまた「響十文字」「響十文字」と申したりき。しかれども「な

すべきことはもとより人にあり、成るべきは天にあり。」のたとへのごとくなるべしと、かくのごとく思ひを勞し、精をすり、辛苦せしこと一箇月に六、七回なり。その定日は怠りなく、わけもなくしておの／＼あひ集まり、会議して読みあひしに、およそ一年余りも過ぎぬれば、訳語もやうやく増し、読むにしたがひ、自然とかの國の事態も了解するやうにて、後々はその章句のあらきところは、一日に十行も、その余も、格別の勞苦なく解しうるやうにもなりたり。もつとも毎春参向の通詞どもへも聞きたゞせしこともあり。また、その間には解屍のこともあり、獸畜を解きて見合はせしこともたびたびなりき。

この会業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人もあひ加はり寄りつどふことなりしが、おのおの志すところありて、一樣ならず。翁は一たびかの國の解剖の書を得、直ちに実験し、東西千古の差あることを知り明らかめ、治療の実用にも立て、世の医家の業にも發明ある種にもなしたく、一日も早くこの一部を用立つやうになしみたしと志を起せしことゆゑ、他に望むところもなく、一日会して解するところはその夜翻譯して草稿を立て、それにつきては、その訳述のしかたを種々さまざまに考へなほせしこと、四年の間に、草稿は十一度までしたゝめかへて板下に渡すに至り、つひに解体新書翻譯の業成就したり。

そも／＼江戸にてこの学を創業して、腑分けと言ひふりしことを新たに解体と訳名し、且つ社中にてたれ言ふとなく蘭学といへる新名を首唱し、わが日本國中の通称ともなるに至れり。これ今時の隆盛を致せし嚆矢なり。今をもつて考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの医書を訳すといふことは絶えてなかりしが、この時の創業、不可思議にも、およそ医道の大

経大本たる身体内景の書にて、これが医書新訳の起始となりしは、不用意をもつて得しところにて、
実に天意とやいふべし。
(蘭学事始)

研究

- 一 玄白たちは、疑問の箇所にごんごんしるしをつけたか。きみたちはどんなしるしをつけているか。
- 二 外國の本を理解するために、いろ／＼苦心しているが、その順序・方法を簡便書きにしてみよ。

- 三 われ／＼がむずかしい文章(たとえばこの教材)を読む時、どういふ順序にするか、玄白たちの方法で参考になることはないか。
- 四 「そも／＼」から終りまでの部分を口語文に書きなおして、文語文と口語文とは、どういふ点が違ふかを考えよ。

〔二〕 ストウ夫人

山本有三

“Uncle Tom's Cabin”は合衆國の奴隷解放に重要な役割をつとめ、南北戦争の原因となったといわれる有名な小説である。この小説の作者が婦人だといえは、りくつ／＼、女らしくない人が想像されるかもしれないが、ストウ夫人は、やさしい家庭の主婦であった。婦人にとって家庭生活と創作とはどんなにして両立することができるか、本課ではストウ夫人の人がらに接するとともに、作家の生活にも理解を持ついとぐちとしたいものである。

ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人はライマン・ビーチャーというカルヴィン派の牧師の娘でし

た。父がオハイオ州シンシナティの近郊にあるレーン神学校の校長をしていた時分、その学校の教師をしていたカルヴィン・エリス・ストウ教授と結婚したのです。彼女が結婚したのは、西洋流に数えて、二十五歳の時です。そしてその同じ年に、彼女はすぐ母親になりました。しかも、同時にふたりの女の子の母親になったのです。ふた子でひとかたならず手がかるのに、その翌々年には、またヘンリーという男の子が生まれました。こういうわけですから、彼女は明けても暮れても、育児と家事に追われ通してました。

そのころ夫人は、友だちにあてて、自分の近況を報じた手紙の中で、こう書いています。

「……実際、私はたゞの雑役婦に過ぎません。子供と世帯の苦勞のほかは、何も考えられません。思想とか感情なんてものは、どこへ飛んで行ってしまったことでしょう。」

現在の私は、つまらない、あわれむべき人間のように思われます。——けれども結婚ということは、結局のところ、非常にいいことだと思えます。夫にかけても、子供にかけても、私はしあわせな女だといわなければなりません。私の子供たちは何物にも換えがたいものです。子供がなければ得られるに違いない氣らくさ、楽しみ、暇、その何物とも私は交換したいとは思いません。」

ところで、夫のストウ教授は、神学者としては相当りつぱな人ですが、何しろ神学校の教師ですから、たいした収入のある身分ではありません。ストウ教授の家財といったら、たゞ書物だけでした。ですから彼女たちの生活というものは、かなり切りつめたもので、たとえば、結婚したてに、ストウ夫人はお客用と台所用の食器類を十一ドルで買いましたが、それで二年間もまにあわせたというような生活です。それから二年後にお客があった時、十ドル出して茶器を一組買足しただけで、あとは

長い間、それっきりで押し通しました。しかしそれでもおさが余って困るといふようなことさえあつたようです。

レーン神学校の財政はらくでなかったものですから、ひいては、それがストウ一家をおびやかす暗雲になっていましたが、財界にあらしが巻き起つて、学校のおもだった保護者の間に破産者が出た年などは、たゞさえない教授の給料が、満足に支拂われないような状態でした。

子供はふえる、家計はかさんで行く、しかも夫の給料は不安定であるという場合、どうしても、何か収入の道を講じなければなりません。けれども、夫は金もうけには縁の遠い学者だとすると、残された道は、夫人が働くよりほかはないわけです。こうして始まったのが彼女の文筆生活です。

彼女は小さい時から、文才のある、趣味の豊かな少女でした。彼女にとっては、父の書齋が最もいい遊び場の一つでした。おとうさんがむすかしい顔をして、聖書を繰りながら、演説の草稿などを書いていられるような時、彼女はよく書齋のすみで、本を読んでいた。家庭が家庭ですから、彼女の読んだものは、ベルの説教集というようなものですが、「アラビアンナイト」や「テムベスト」なども、彼女の小さい手で、何度も開かれたものです。そしてこれが彼女の文学的才能を最初に開いてくれたものです。

学校の課目のうちで、彼女が一番好きだつたのは作文です。作文では、先生や父親をしばしば驚嘆させました。彼女は次第に詩に興味を持ち、ひそかに詩人になることを夢みていました。が、「クレオン」という詩劇を書いたりして、あまりその方に夢中になったものですから、一番上の姉キャサリンにしかかれて、創作を禁じられてしまいました。

しかし、父が神学校の校長になったころは、彼女ももうりっぱな一人まえの婦人になり、キャサリンの始めた女学校の教師を勤めるようになっていました。好きな道なものですから、彼女は学校のあい間に、おろ／＼小説を書くようなことがあり、ある時は「アングルーロット」という短編が認められて、五十ドルの懸賞金をもらったことさえありました。

こういうわけで、今ストウ夫人が働けることといつたら、まず原稿を書くことでした。これなら、うちにもできる仕事ですし、自分が小さい時から望んでいたことですから、それによつていくらかでも家計の手助けができるならば、一挙兩得というわけです。けれども、彼女はなか／＼ペンをとる暇がありませんでした。乳のみ子をかくえている上に、上の子供もまだ小さいのですから、ちつとも手が放せません。洗たく物は目の前にたまっていきます。おそろじもしなければなりませんし、パンやお菓子も焼いておかなければなりません。ほんとうに家庭の主婦というものは、さっぱり自分の時間というものを持つことができないものです。

ですから、普通の作者のように、自分の机の前にすわつて、ゆっくり書くというようなことは、ストウ夫人にはほとんどできません。彼女がちょっとの暇を見つけては、台所のすみで、あるいは何かの箱の上で、ペンを走らせることが多かったのです。

原稿の催促には、姉のキャサリンがやつて來ました。かつては文学に熱中してはいけなうと言つてしかつた姉ですのに、今度は早く書け、早く書けと言つてストウ夫人をせき立てます。

家事に追われて原稿ができていないと、姉はよく言いました。「一ページ、二ドルよ。おまえさんは十五分で一ページ書けるんじゃないの。さ、早くやつて、早くやつて。」

マイナという黒人の小さい女中を相手に、台所でパンやお菓子を焼いているような時にも、姉に原稿を催促されると、ストウ夫人は、ペンとインクを台所に持ちこんで、麦粉やラードなんかの載っているテーブルの前に腰をかけます。

「マイナ、ようござんすか。さっき言った通りにするんですよ。わかっていますね。あたし、ちょっと原稿を書かなくっちゃならないから。——あら、インクスタンド、どこへやったかしら。」

インクを湯沸かしの上に置き忘れて、小さいマイナに笑われたりします。

彼女はエブロンについての麦粉を拂い落して、静かに黙想にふけります。やがて彼女はラードやジンジャのにおいのあるテーブルの上でペンを走らせませす。

「奥さん、こいつも皮をむくんですか。」

小さい女中は、すら／＼連んでいる夫人のペンを、遠慮なく中断します。

「しよがないのね。さっき、あれほど言っておいたじゃないの。——え、薄くむくのよ。」

夫人は再び原稿に向かいます。

「奥さん、黒パンが先ですか。白パンが先ですか。」

しばらくすると、かまの下に石炭をくべているマイナがまた妨げます。

「黒パンが先よ。——あ、きょうはだめだわ。あたし、もう書けないわ。」

「そんなこと言っちゃ困るじゃないの。締め切りにまにあやしない。——なんだったら、口述にしたらどう。あたしが筆記するから。」

おもりをしている姉は、赤ん坊をバスケットに入れて、おもちゃをあてがい、自分もペンを取り上

夫人は額に手を当てながら、考え／＼文章を口に移して言うと、姉はそれを筆記して行きます。

「私には子供たちへの義務があります。その時がきつと来るに違いありません。あなた。子供たちを連れて行かないってことはありません。子供はこの世での、私の最後の慰めですわ。」

「奥さん、卵のからはどうしますべえ。」

黒人の女中がひよつとことばをはさみます。

「横のおけへお入れ。」

「子供はこの世での、私の最後の慰めですわ。」

姉は口の中で復しようすると、「それから。」と、あとを催促します。

「子供たちを連れて行かないってことはありません。たぶん——いゝえ、きつと、——私はすぐあとから行きます。けれど、妻としての張りさけるような心は、もう少し、もう少し、となお哀訴しています。」

「ジンジャーパンは、あとのくらい入れときますべえ。」またしても、マイナがじゃまします。

「あと五分。」

「もう少し、もう少し。」と筆記しながら姉がくり返すことは、そのまゝマイナへの返事にもなったので、ふたりは顔を見合せて、どっと笑います。

これほだいたい、姉のキャサリンがそのころのことを記録しておいたものから、適宜に抜き書きしたものです。当時の有様が目に見えるような気がします。

ストウ夫人の文学的な生活は、こういう形で始まったのです。

(戦争と二人の婦人)

研究

- 一 ストウ夫人の家計は、豊かであったか。それが、文筆生活を始めたことと、関係があるか。
- 二 ストウ夫人は、学校の課目の中で、何が一番好きであったか。そのころの、彼女の夢は、何になることであったか。
- 三 ストウ夫人は、家庭のどの場所で、どういうふうにして、小説を書いたか。
- 四 ストウ夫人の、すぐれている点を考えよ。
- 五 ストウ夫人の傳記を調べ、その代表的作品「アンクル・トムズ・シューズ」が、調査と研究の後に生まれたものであることを、知るようにならう。
- 六 「ます」「です」で終る文と、「だ」「である」で終る文とがある。この教科書の文章を、この二つに区分してみよ。そして、感じがどう違うか、話しあおう。

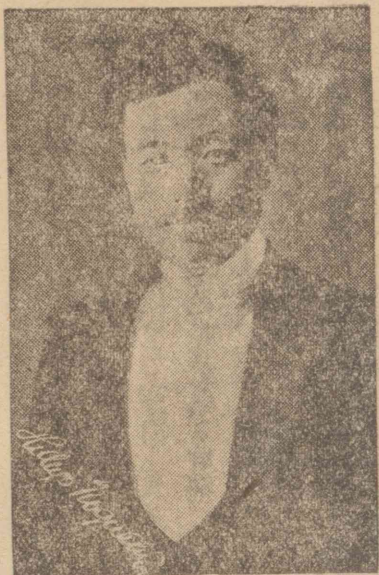
〔三〕 ふるさとの英世

宮津 博

野口英世は各種の病菌の発見によって世界的に知られている細菌学者である。昭和三年アフリカで黄熱病を研究中、それに感染してなくなった。この劇は英世の少年時代を描いたもので、登場人物も少なく、舞台面も簡単であるから、学校劇として演ずるのにてごろであろう。

第一幕

明治二十二年の冬



第二幕

野口清作の家

明治二十五年の夏

長照寺境内

人物

- | | |
|-----------|------|
| 野口清作 (英世) | 十四歳 |
| 父 佐代助 | 四十九歳 |
| 母 シカ | 三十七歳 |
| 姉 イヌ | 十六歳 |
| 代吉 | 十五歳 |

(以上、第一幕の時の年齢)

小林先生

三十三歳

その他 長照寺の和尚 村人

第一幕

会津翁島千代田村の貧農、野口清作の家。

冬の夜。

いろいろのそばで母親シカと姉イヌがなわをなっている。

少し離れたランプのともしびの所で、清作と代吉が勉強している。

四 すぐれた人々

そのうしろに弟の清三の寝ているふとんが敷いてある。

代吉 (英語のリーダーを持って) This is a pencil. It is a dog.

清さん、まだかい。

清作 うん。もうじきできそうだ。待っていてくれ。(紙の上で数学の問題を解いている。)

代吉 清さんは、ほんとうに、がんばりやだからなあ。

清作 え、と「甲は毎秒二メートル、乙は毎秒一・五メートルの速さで歩むとすると、乙が十秒前に出発した後を甲が追いかけて行けば、甲は出発後何秒で乙に追いつくか。」というんだから……甲の……。

代吉 さすが数学の大先生も降参するかね。

清作 なあに、まいるもんか。

代吉 算術で解けば、よくにだつてできるんだけど……。

清作 そりゃ簡単にできるさ。つまり、甲の出発の時に乙は甲より十五メートル先を進んでいる。ところで、一秒間に甲は乙に〇・五メートルずつ近づくから、十五メートルを〇・五メートルで割れば、甲が乙に追いつく時間、すなわち三十秒が出て来る。……しかし、これを代数で考えると……うん、わかつた。わかつた。

代吉 わかつたかい。(乗り出す。)

清作 (夢中で) 應用問題を解くには、題意を十分に調べて、適当な未知数を選ぶことがかんじんだと言われた、小林先生のおことはの意味がよくわかつたよ。ね、いいかい代さん。今のこの三

十秒後を題意と考えて x とするんだよ。するとね、 x 秒の時までに甲の歩む距離は $2x$ で、乙がさいしょから歩む距離は一・五メートルに x 秒と十秒とをかけたものになる。だから、 $2x$ は一・五かつ十たす x かつことなつて、これを解くと x が三十と出て来る。そうら、どうだい。

代吉 なあるほど、すごい。

清作 やあれやれ、とうとうできた。(鉛筆を投げて腰を伸ばすためにあお向けに寝る。両手を上げた時、左手の指がやけどのため、木の切り節のようになっているのが見える。)

代吉 実際はくの方もくたびれたよ。(同じように伸びて) 清さんの根氣のよさにはあきれるよ。うちのおかあさんも言つてたが、清さんが、数学や英語のような、めんどろな学問ができるのは、清さんが努力家だからつてよ。清さんほくのうちのふろをたきつけに来る時でも、決してリーダーを放さないんだからねえ。

イヌ (自在かきのお湯をついで) さあ代吉さん、勉強ができたからごほうびのお茶を。

代吉 ありがとう。しかし勉強ができたのは清さんの方だよ。

イヌ あんまり清さんをほめないでね、ますく〜てんぐになるばかりだから。

代吉 ほめるのはばくばかりじゃないよ。長照寺の和尚さんまで、清さんの英語はものになるつてさ。

清作 よせよ、代さん、それより、一つ腕すもうでもしようよ。

代吉 うん、やるかな。これまでの戦績は六十八対三十一だったね。——よろしい。では、いよいよ

よ第百回めの腕すもう戦、はたしてどちらに軍配があるか。清作三十七点の勝ち越しに對し、豪勇代吉の肉迫いかななるや。いよ／＼お待ちかねの第百回戦の火ふたは切られる。――さあこい。

清作 よしてきた。(腕すもうが始まる。)

伊又 代吉さん、しつかり。

代吉 (うなりながら) 今度こそは……。 (あつさりと負けてしまふ) 百回めもついにだめか……。 (イヌ、いろいろのところへ笑いながらもどる。)

シカ ほんとに代吉さんはおもしろい人ね。

伊又 おかあさんも、一休みして、お茶にしたら。

シカ あたしはいいいよ。もうすこししあげとかないかね、あしたの朝までに十足ぶん届けられないからね。(と言いながら雪ぐつのなわをなつてゐる。)

伊又 (ふとんをなおして) だいじようぶ。――それにしても、おとうさん、おそいわね。

シカ 雪は。

伊又 まだやまない。――おとうさん、酒屋へまわつたのかしら。

シカ 雪おろして疲れたのでしょ。

伊又 たぶん、久しぶりでお金はいつたから飲んでゐるのよ。でも、せつかくの村長さんの御厚意も、おとうさんにはわからないのね。

シカ そんなふうにするものではありません。

伊又 だつて、清さんがあんなにほしがつてゐるナシヨナルリーダーのお金、おとうさん、自分の

飲み代に使つてしまふんだもの。

シカ (だまつて仕事を続ける。それで伊又も大きくため息をつき、また仕事を手傳う。)

代吉 (起き上がって眞顔になり) ところで清さん、ぼくね、あした小林先生のところへよばれてゐるんだよ。西川君、八子君もいっしょさ。先生はなんでも清さんのことで、みんなと相談したいとおっしゃるんだ。

清作 (ちよつとびっくりして) ぼくのことで。

代吉 うん。

清作 一体なんのことだろ。

代吉 別に心配することはないさ。ほら、月曜日に読んだきみの作文のことでさ。あの時は實際はくも声出して泣いたよ。小林先生も読み終つたあと、たまりかねてハンカチ出して、しばとく目を押さえていられた。あんなに清さんの氣持がつゝみ隠さず書かれてゐるんだものね。

清作 (じつと自分の左手をみつめ) てんぼう、てんぼう(だん／＼あさけるように) このてんぼうのために、どんなに苦しんで来たか……。このかたわのためにどんなに悲しんで来たか……。いや／＼そんなことはどうでもいい。どうせぼくはてんぼうでかたわなんだから。

代吉 だけどね、清さん、ぼくちちきのも話しあつたけど、清さんのその手は手術すればなおると思うんだよ。いい医師にかゝつて入院すれば、きつとまたもと通りになると思うんだよ。(神経質に) きみはこの手がなおると思う。――ぼくのこんな手が。ぼくはね、時々このくっ

ついで指を一つ、小刀で引き裂いてしまいたくなるんだ。(と、いきなり小刀を手にして、指に突き立てようとする。)

代吉 (びっくりして、) 清さん。(と清作の右手を押さえる。)

その時、どさりと戸のあく音がして、雪とともに父の佐代助が、ころげこむようにはいつて来る。酔っているのだ。

佐代助 いやあ、どうもおそくなつてすまぬ。すまぬ。(みのだとか雪かきだとかわからくつをあちこちに脱ぎすてて炬の前にすわりこむ。)ほんとに家ん中はあつたかいのう。はあーつ。御飯は。(立ち上がって、水屋からどんぶりを出そうとする。)

シカ いや、いらぬ、いらぬ。きょうは久しぶりでみっちり飲んだから、なんにも食いたかない。(代吉を見て、)——お、そこにいらつしやるは、松島屋の若だんな様じゃねえか。はっはっはっはっ。(意味もなく笑う。)

代吉 (ばつが悪いので立ち上がり、) 清さん、帰るよ。代数の問題ありがとう。清作 うん。

シカ 代吉さん、もつとゆつくりなさいよ。

代吉 もう勉強済んだから、またあしたおじゃまにあがります。

シカ そうですか。遠慮しないでゆつくりして行けばいいのにねえ。

佐代助 そうだ、そうだ。酔っぱらいが帰って来たからって、そう急いで逃げて帰らずともいいじゃねえか。

清作 (たしなめて、) おとうさん。

イヌ (代吉を送り、) 氣をつけてね。——あら、まだひどい雪ね。今夜はふぶくかもしれないわ。(戸をしめる。)

佐代助 (炬にねそべりながら、) 村長の二瓶ふたびんさんがな、雪おろしのお礼だと言うてな、五十銭くれたよ。五十銭銀貨をよ。

シカ それはようございましたね。

佐代助 うん、全くありがていこつた。

イヌ おとうさん、そのお金は清さんの本を買うために、村長さんが特別にはからってくださいったお金じゃないの。

佐代助 ば、ば、ばかなことを言うない。

イヌ それとも、お酒を飲むようになって、よこしたものの。

佐代助 そりゃあたりまえさ。あたりまえだよ。おれの働くものを、お、お、おれが使うてなせいけねえんだ。

イヌ おとうさん、少しは家のことや清さんのことを考えるといいわ。

佐代助 よけいなこと言うねえ。

シカ (イヌに、) もうおよし、せつかくおとうさん、いいごきげんになっているものを。

佐代助 そうだ、そうだ。せつかくの酔いがさめてしまうわ。へん、おもしろくない。(ふら／＼歩いて清三のふとんの中にもぐりこんでしまう。)

清作 (父がふとんにぐりこんだのを見てランプを消し、炬のところに行き、) おかあさん、手傳いましよ

シカ いいよ おまえは。

清作 ぼく、働きたいんです。

シカ おまえは勉強さえすればいいんだよ。小林先生もあんなに力を入れて、おまえが将来、学問の道に進むことを保証してくださいってではありませんか。

清作 ぼくなんかだめです。先生や友だちにそんなにかわいがられる理由がわかりません。それにうちがこんなに貧乏なのに、長男のぼくひとり働かずに、自分勝手なことをしているのは、ぼく、たまりません。

イヌ 清さん、働くのは、あたしとおかあさんとでたくさんなのよ。

シカ たくさんだとも、おかあさんひとりだけでも。そうぞ、リーダーとかいう本も、あしたわらぐつをこしらえて持って行けば、買ってあげられるし……。

清作 そのわらぐつのお金は、ランプの油や、清三のお正月のたびを買うのに使うことになってい
たじゃありませんか。——おかあさんやねえさんは、なせぼくが働くのをとめるんです。——
ぼくがてんぼうのかたわ者だからですか。

シカ (清作の声があんまり大きいので、びっくりして、) 清さん。

清作 (ひねくれて、) きつとそうなんだ。ぼくがてんぼうで働けないから、ぼくに学問させるより
ほか道がないと思ってるんだ。

イヌ 清さん。まあ、そんなことを。

清作 (興奮して、) ぼくだって働けますよ。力も代さんより強い。わらを打つことも、車をひくこと
も、ぼくにはできるんです。

イヌ 清さんには、おかあさんの気持ちがわからないのよ。

清作 ぼくには——ぼくの方こそわかってもらえないんだ。おかあさんおねえさんを働かせて、ぼ
くだけのんきに勉強続けて行くことはできません。(泣きだす。)

シカ 清作。(あらたまって語氣を強め、) おまえのその手をおかあさんにお見せ。(清作、泣きながら
左手を出す。シカは思い出すようにしんみりと話す。) そう。ちょうど三つの年の夏だったねえ。

——あの時は農家の忙しい時でした。おかあさんは、この炬の自在かぎにするのなべをかけ
て、つゆの実を取りに裏へ出た、それはほんのちよつとした間だったのです。おまえはひと
りはいだし、しるのなべに手をかけ、熱いしるを浴びてしまったのです。その上燃えるまき
に柔らかい手を入れてしまった。(清作の左手をとって、) ひきつるようなおまえの泣き声——
その声を聞いた時、おかあさんはどんなに申しわけなく思ったかしれません。おかあさんと
命を取り換えられるものならと、一心に手当てはしたものの、どうやらやけどはなおつたが、
あとはこの通りのかたわ……。それからというもの、なんとかして名医にかけても、おまえ
の悲しみを取り去ってあげたいと心にかけない日はなかったのです。でも、あれから十年た
ってもこの通りの貧乏暮らし、おまえのために十分な治療を施すことができずに過ごして來
ました。——清作、おかあさんは、おまえがひとの言うてんぼうだから、働かさずに勉強を勧
ました。

めているではありません。おまえのてんばうはおかあさんのあやまちです。だから、きつとおかあさんがおしてみせます。たゞ、おかあさんは、おまえが、おかあさんの不注意をせめすうらまず、また、ひとのそしりにもひねくれず、りっぱに小学校を優等で卒業し、今はまた猪苗代高等小学校にはいつて、小林先生に見こまれるほどりっぱな成績をおさめているのを、どんなに喜びにもし、頼みにもしているかわかりません。——清作、どうかお願いだから、自分を苦しめず、また、おかあさんのことも氣にかけて、しっかりと勉強しておくれ。そして、それこそりっぱなおとなになって、この倒れかゝった野口家を興しておくれ。

おかあさんの生きる望みは、たゞ、おまえにかけているのだからね。

清作 (涙をふきながら話を聞いていたが、) おかあさん、すみません。(頭をさげる。)

シカ おかあさんにあやまることなんかありゃしないよ、清作。

この時、村人の戸をたたく音。そして声が聞える。

村人 おシカさん。おシカさん。(戸をたたく音。) 来ておくれ、早く。吉田のお梅さんがな、陣

痛おこしているんだ。(戸をたたく。)

イヌ はい、はい。(と返事して、) おかあさん、お梅さんがお産ですって。

シカ (す早く産婆の道具を包みながら、) それ、今度はお産婆さんの御用だよ。

イヌ (母にみのとかさをかぶせながら、) 氣をつけてね、おかあさん。

シカ だいじょうぶだよ。(戸をあけて、) はい。お待ちどおさま。

村人 (ちょうちんの明かりだけ見せて、) どうも夜分おそく御苦労さまです。

シカ い、え、なんのこんなこと……。 (シカ戸をしめて出て行く。)

清作 (もどって来たイヌに、) わらぐつ、あと何足作ればいいの。

イヌ 四足と半分。

清作 ぼくはきょうの勉強もう終ってるんだ。ねえさん、お手傳いするよ。(とわらを自分の身のまわりに引き寄せ、不自由な手でなわをないはじめる。) おかあさんもたいへんだねえ。

イヌ (仕事しながら、) いっしょうけんめいよ、清さん。

—幕—

第二幕

磐梯山の見える翁島長照寺の境内。

せみの鳴き声の聞える夏の午後。

寺の裏から和尚と野口清作と母親シカが出て来る。清作は左手にほうたいして、その端を首にかけている。

和尚 清さん、うれしいかね。

清作 はい。(顔色が白くなって、背も伸び、前幕よりだいぶおとなっぽくなっている。)

和尚 おシカさんもうれしいだろうね。

シカ 清作の手術が無事にすんだのも、みなさんのおかげです。

和尚 いや、おシカさん。あんたの心がけがよかったから成功したんじゃ。清作さんも、いい

おかあさんを持って幸福じゃのう。

清作 はい。

四すぐれた人々

和尙 You are very happy.

清作 Thank you, I am very happy.

和尙 ほ、う、清作め、一月入院しても英語だけは忘れないとみえる。

清作 和尙さん、また代吉さんといっしょに英語をおそわりに伺いますよ。それを楽しみに帰って来たのです。

和尙 いいとも、わしもおまえたちに授業していると勉強になる。いつから来るね。

清作 あすから。

和尙 おや、退院早々の勉強はじめかね。あい変わらずのがんばりやだな。

シカ それでは和尙さん、こゝでごめんさせていたゞきます。

和尙 そればわざ、お立ち寄りくださってありがとうございます。清作君、お大事にな。(ていねいに礼をして去る。)

清作とシカも去ろうとすると、向こうから小林先生がやって来る。

清作 あつ小林先生が……。

小林 (かけだして来て、) お、野口君。よかった、よかった。

清作 先生。(ぼろ／＼涙を流す。)

シカ 先生、おかげで無事に退院することができました……。

小林 おめでとうございます。清作君もおめでとう。

シカ ありがとうございます。ありがとうございます。(たもとで涙をふく。)

小林 きょう、退院の日というので、けさからお宅にお伺いして待つておりましたが、なか／＼帰つて来ない。それでいたゞまれず病院まで迎えに行こうと出て来たところでした。(清作の方を向いて、)野口君、みんなきょうの日を楽しみに待つていたよ。

清作 ありがとうございます。先生、手をお見せしましょうか。(首のほうたいをはずしかける。)

小林 いや、あとでゆつくりと、みんなといっしょに見せていたゞくことにしよう。その方が楽しみだからね。

シカ 先生、それではまたうちへ寄つてくださいますか。

小林 もちろん寄らせていたゞきます。

シカ きょうは清作のお祝いの日ですから、先生においでいたゞかないと……。

小林 そうです。お祝いの日です。そしてまた新しい人生への出発の日です。

清作 (母に、)おかあさん、ばくこゝで、もうすこし先生とお話したいと思つていますか……。

シカ いいとも。ゆつくりと先生にお礼を申し上げなさい。おかあさんはしたくのことので一足先に帰らせていたゞきますから。でも必ず先生を御案内するんですよ。——先生、お待ちいたしておられますから。お先に。(そゝくと立ち去る。)

小林 どうぞ。(見送つて、)きょう、母のうれしそうなここ。(すぎの木立ちの所まで歩き、)野口

君、磐梯山があんなに美しいぞ。見てまえ。

清作 先生。

小林 うん。

清作 ぼくはもうてんぼうじゃありません。

小林 うん。そうだ。

清作 もうかたわでもありません。

小林 むろんだとも。何一つ不足はなくなったのだ。

清作 はい。(歩みよる。) ぼくが入院できたのも、こうして手術して手をなおしていたぐけたのも、みんな先生のおかげです。

小林 先生ばかりじゃないさ。代吉君はじめ西川君、八子君、それから組の人たち、それに猪苗代校の教員一同が、きみのためにお金を出しあつたのだ。

清作 先生、この御恩は決して忘れません。

小林 ありがとう、野口君。しかしみんなはきみに恩をかけようと思つて鑿金したのではないんだぞ。きみのおかあさんと同様、それが母親や友だちや先生の当然の義務と信じていたからこそ、盡くしたまでのことだ。

清作 先生、すみません。ぼくの言い方が悪かったです。

小林 なあに、すむもすまないもありゃしない。(切り株に腰をおろしながら。) ところで、手術のあとは痛むかね。

清作 少しも痛みません。

小林 ちょっと見せてくれないかね。

清作 だって、先生はあとでゆっくりごらんになるとおっしゃっていたではありませんか。

小林 うん。そりゃ、ゆっくりとながめるのは、まとも結構なんだが、今は、ちよつとのぞかせてほしいんだ。

清作 (笑いながら) 先生、するいですよ。

小林 きみこそもつたいぶつて。(笑う。)

清作 (ほろたいを解きながら) 先生、笑わないでくださいいね。

小林 なあに笑うもんか。(指を見て) よし、なまっている、確かに。

清作 親指も動くんですよ。ほれ、中指も、小指も。

小林 しまつときなさい。大事に。(命令するようである。)

清作 (再びほろたいをかけたが) 先生、医術つて、全く、奇蹟のようなものですねえ。

小林 奇蹟ではない。科学さ。——この科学が人類の進歩に大きな影響をもたらすのさ。

清作 多くの幸福も科学によってつくられたのですね。

小林 そういわけた。しかし、若松の渡辺ドクトルの技術もすばらしいものだなあ。

清作 ええ、もう二度となおるまいと思ひこんでいたこの手が、すっかりなおってしまったのです。くつついていた指の一本一本が、離れぬに自由に動くようになったのですから……。

小林 すぐれた技術者だ。ドクトルはカリフォルニア大学で勉強して來られたと聞いていたが……。

清作 そうです。書齋には英語やドイツ語の本が山と積んでありました。

小林 あの人の専門は外科だそうだが、内科にかけても、東北で指折りの人らしい。やはりほんとうに勉強するには、外國へでも出かけて行って、よい研究所で勉強する覚悟でなきゃいかん。

清作 病院も全部西洋造りでした。ドクトル先生は診察なさるにも洋服を着ていました。からだの大きな、それはそれはおもしろいおかたでした。

小林 うん、うん。

清作 ドクトル先生は、ぼくの入院中、いろいろ医学の話聞かせてくれました。熱して来ると演説まで始めました。それから、先生、ぼくは、顕微鏡までのぞかせたいのです。

小林 顕微鏡までね。ふん。

清作 え、ぼくはあの顕微鏡のレンズを通して、たくさん細菌のいる果実を見ました。そうそう、先生、一滴の水の中にも無数のばい菌がすんでいるものなのです。ええ。(清作の目が輝いて来る。)先生。

小林 なんだね。そんなにあらたまつて。

清作 先生、ぼくはお医者さまになろうと決心しています。

小林 うん。

清作 先生の御意見はいかがですか。

小林 (考えていたが、)よかろう。先生も大賛成だ。

清作 賛成してくださいますか。ぼくの医者になることを。

小林 賛成どころか、これからきみがその道に進むために、できるだけの應援もしよう。

清作 (うれしそうに、)先生。

小林 野口君。きみのきょうの喜び、きみのきょうの感激、そしてきょうの決心が、きみをりっぱ

な医者になることを、先生は祈る。きみは熱心だ。その上がんばりやだ……。それこそ何事もやり遂げずにはおかない、何事も見きわめずにはおられない科学精神を体得している。それらは、きみを將來、日本の偉大なる医学者として世界の舞台に立たせる絶対の素地となるものなのだ。(興奮している。)先生はそのことを信じている。先生はきみがその道を通すことを堅く信じている。

清作 ぼく、きつとやってみせます。やってみせますとも。

小林 やり遂げてみせなさい、野口君。(清作の手を握る。)

清作 先生。(感激の涙が落ちてとめどがない。)

この時、清作の姉のイヌがふたりを迎えにやってくる。

イヌ 小林先生、お待ちしております。

小林 (気がついて、) あ、これはどうもわざわざ。

イヌ 清さん、どうしてこんなところでゆっくりしていたの。

清作 うん。

小林 わたしたちは話に夢中になっていて、すっかり家へ帰るのを忘れていた。

イヌ どうぞおいでください。お待ちしておりますから。

小林 行こうかね、野口君。そう待たせても悪いから。

イヌ (清作のそばに行き、)清さん、(にこ／＼しながら、自分の手を清作と同じようなかっこうにして、)なかつたつてねえ。

清作 え、すっかり。――見せてあげようか、ねえさん。

イヌ いいわよ、こんなところで。あたし、うちに帰ってから、ゆつくりと拜見するわ。

清作 おや、ねえさんも小林先生と同じようなことを言うなあ。(ふたりして笑う。)

小林 (明かるく笑いながら、) 清作君はね、手をなおしてもらったので、そのお礼に、自分はいか
らすばらしい医者になるって、はりきっていたのです。

清作 そうじゃありませんよ、先生。医学のおもしろさを知ったのですよ。

小林 ばい菌なんかのね。

イヌ まあ、いやだ、ばい菌のおもしろさだなんて。

清作 先生は、すぐばくの言うことをじょうだんにしてしまうんだもの。

村人の歌が聞える。

いやあ、会津磐梯山は宝の山よ、

さうにこがねが、えゝまたなりさがる。

Record

小林 磐梯山か。(ふり返って心もち山の方へ歩き、) 磐梯山は全くゆつたりとしたいい山だ。(清作も

イヌもそれに誘われて歩く。) わたしたちは、あの山のような心を持って、あの山のような多
生きぬいて行きたいものだ。ねえ、清作君。

清作 はい。そう思います。

村人の歌はなおも続いている。

――幕――

(脚本シリーズ第三輯)

研究

一 清作が、数学の問題を解きえたのは、頭が
よいからか。それとも、根気がよいからと思
うか。

二 清作は、幾つの時、どうして、左手がかた
わになったか。

三 だれの厚意で、清作は手術して手をなおす
ことができたか。

四 清作が医学に志した動機について考えよう。

五 小林先生とイヌとがなあった手をあとでゆ
っくり見ると言ったのは、どういう感情から
であろうか。

六 イヌの清作に対する愛情は、どこに現われ

ているか。あげてみよ。

七 小林先生は、磐梯山を見て何を感じたか。

八 この話の大意を、短い文章にまとめてみよ
う。

九 この地方では、方言が話されているのに、
この戯曲では、標準語を使っている。どうい
うわけと思うか。

十 この劇が幾つの場面からできているか教え、
「風の又三郎」のシナリオと比べて、場面の
少ないことを知り、それがどういう事情によ
るのか、考えてみよう。

Approved by Ministry of Education
(Date Jan. 7, 1949)

私たちの國語

一
上

昭和二十三年八月十七日印刷
昭和二十三年八月二十一日發行

定價 金十五円九十錢

著者

文壽堂出版株式会社
代表者 寺島友之

發行者

東京都中央区銀座西五ノ四
文壽堂出版株式会社
代表者 佐藤繁次郎

印刷者

横浜市金沢区堀口八八
佐藤 繁次郎

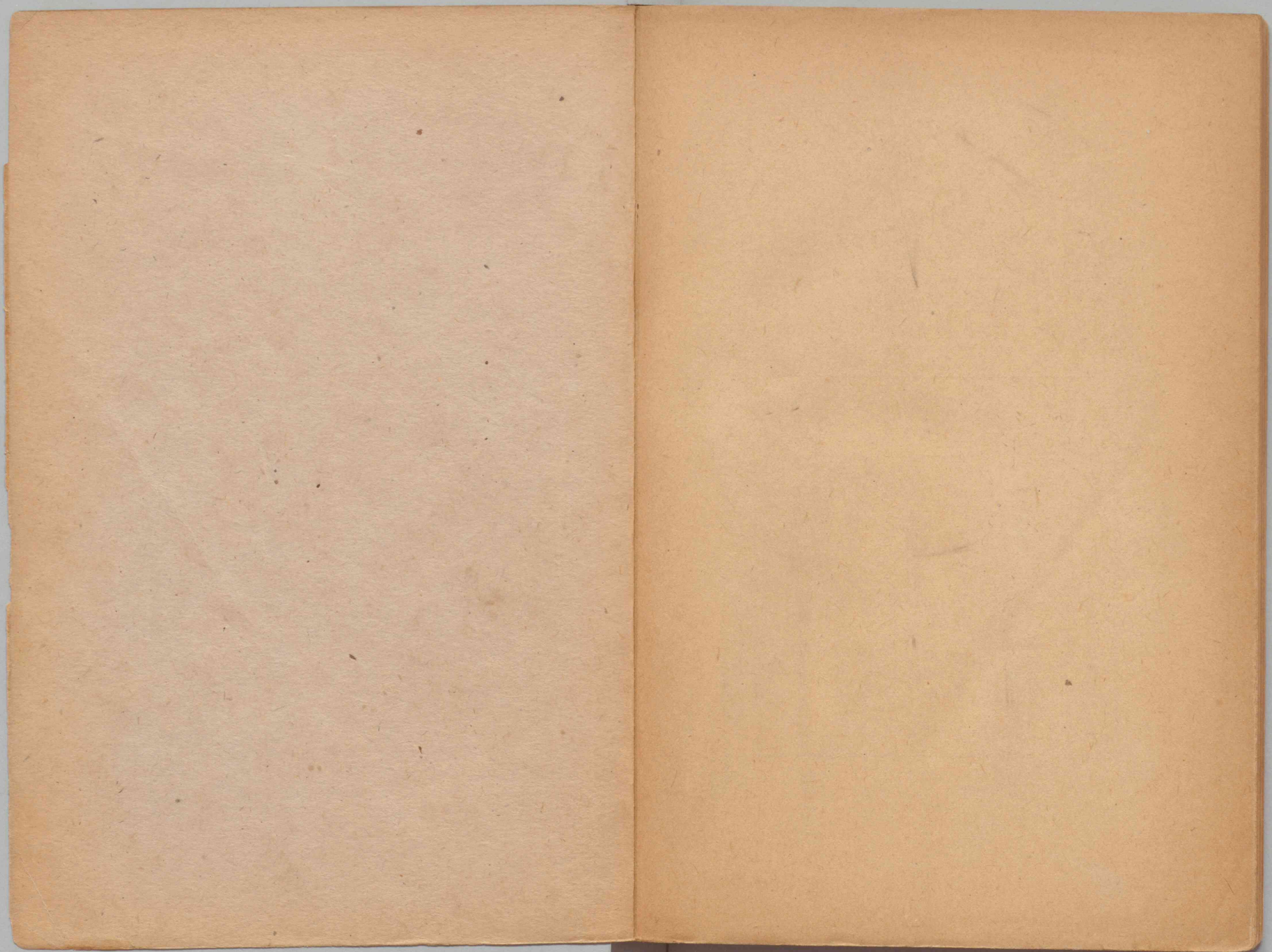
印刷所

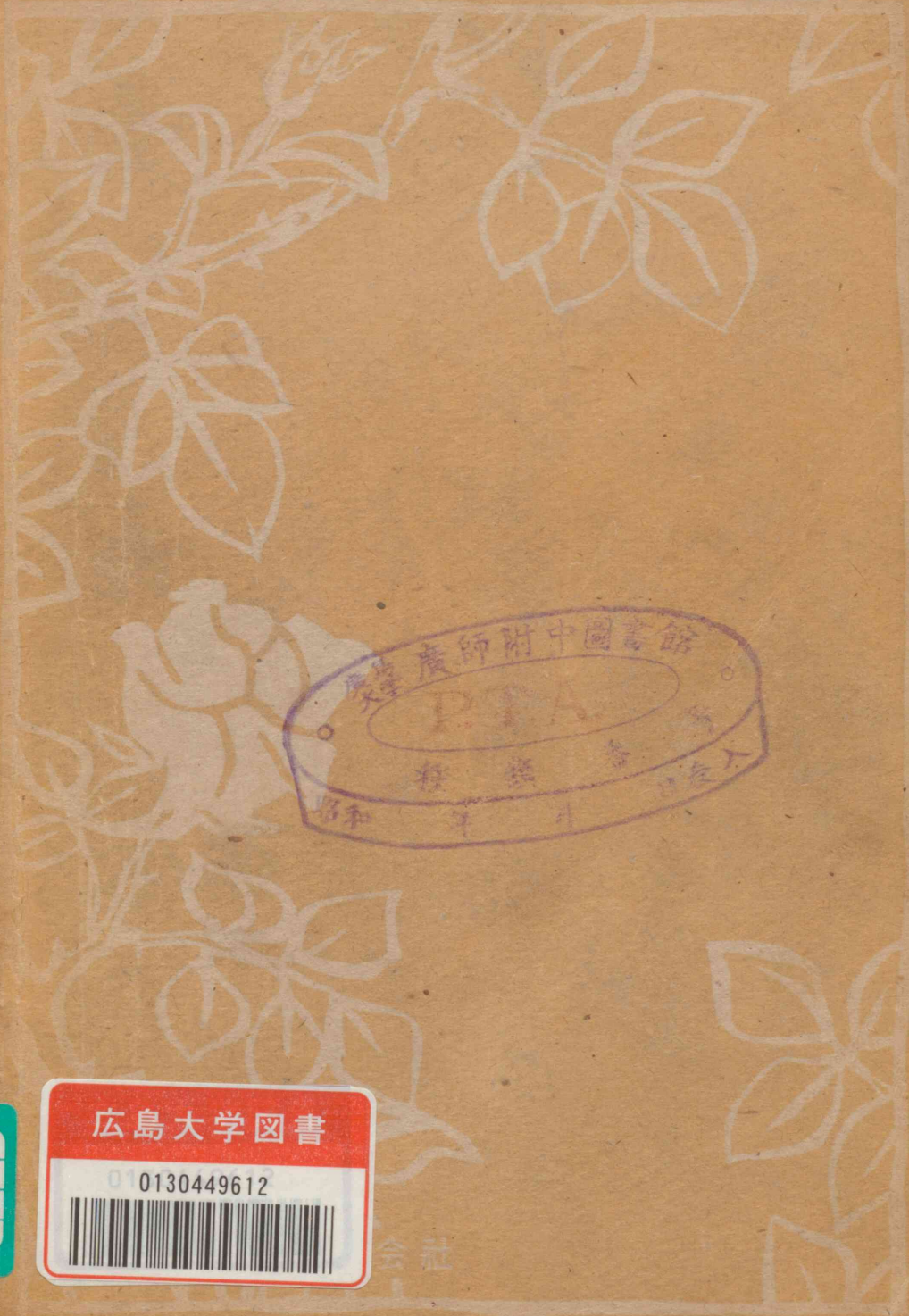
横浜市金沢区堀口八八
文壽堂印刷株式会社

發行所

文壽堂出版株式会社
東京都中央区銀座西五ノ四

著作權
所有





廣島師範附中國書館
P. 11
昭和 年 月 日 入

文庫

48
612

広島大学図書
010130449612
[Barcode]

会社